

高知県香美郡野市町

大 谷 古 墳

— 県立野市総合公園建設に伴う —
発掘調査報告書

1991・3

財団法人 高知県文化財団

高知県香美郡野市町

大 谷 古 墳

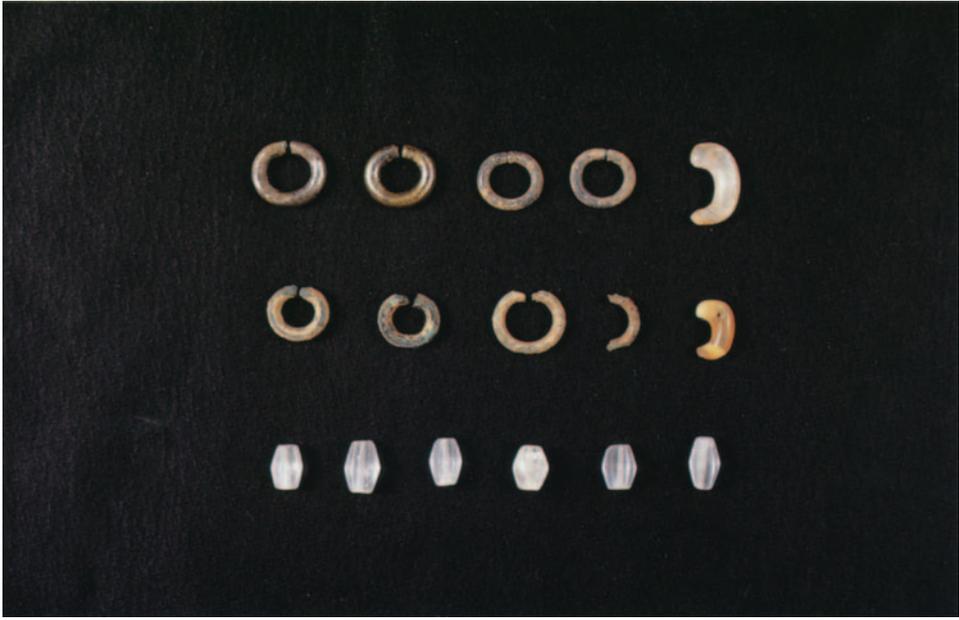
— 県立野市総合公園建設に伴う —
発掘調査報告書

1991・3

財団法人 高知県文化財団



石室全景



耳環、玉類



赤色顔料付着の須恵器杯身

序

県民の文化的ニーズに幅広く答え、潤いとやすらぎのある豊かな県民文化の振興に資するため、県及び市町村並びに民間の深い御理解と御協力をいただきまして、平成2年3月に財団法人高知県文化財団が発足致しました。

埋蔵文化財の調査・研究、普及と啓蒙についての中核施設として設置が望まれていました埋蔵文化財センターにつきましては、県民の皆様方の暖かい御理解と御協力のなか、次年度にオープンする予定であります。発掘調査等への円滑かつ迅速な対応、埋蔵文化財の保存と公開など、これまでにまして柔軟で弾力的な運営を図りたいと考えますので、今後共、御協力方いただきますようよろしくお願い申し上げます。

本書は、当財団埋蔵文化財センター開設準備室が整理業務を進めてまいりました野市町大谷古墳の発掘調査成果をまとめたものであります。学術資料として広く御活用いただくと共に、文化財保護の一助となれば幸いに存じます。

おわりに、調査成果のとりまとめにあたって御協力、御援助いただきました高知県土木部並びに高知県教育委員会、野市町教育委員会、地元大谷地区の皆様方をはじめ、調査関係者各位に厚くお礼申し上げます。

平成3年3月31日

財団法人 高知県文化財団

理事長 中内 力

例 言

1. 本書は、県立野市総合公園（のいち動物公園）建設に伴う大谷古墳（野市町大谷139所在）の発掘調査概要報告書である。
2. 発掘調査は、高知県教育委員会が主体となり、平成元年7月11日～平成元年8月19日の間に実施した。整理作業は、平成2年度に高知県の委託を受けて財団法人 高知県文化財団（埋蔵文化財センター開設準備室）が実施した。
3. 現地調査は、高知県教育委員会文化振興課埋蔵文化財班主幹山本哲也、主事吉原達生が担当した。また、整理作業は（財）高知県文化財団 埋蔵文化財センター開設準備室 調査係長山本哲也が担当した。
4. 本書の編集、執筆は山本が担当した。
5. 本書で使用した挿図のうち、第1図（上）及び第2図（上）は、国土地理院発行25,000分の1地形図「後免」・「土佐山田」（N1-53-28-7-2 N1-53-28-7-1）を1/2に複製縮尺したものである。また、第1図（下）は高知県作成「野市総合公園平面図」（縮尺1/1,000）を、第3図は同平面図（縮尺1/500）を複製使用した。なお、挿図の標高は海拔高で、方位は磁北によるものである。
6. 遺物は、土器1/4・鉄器及び馬具類1/2・装身具（耳環・玉類）1/2に統一した。遺物番号は実測図番号と一致している。
7. 鉄器及び馬具類等については、保存処理を施した。出土遺物は、財団法人 高知県文化財団で保管している。
8. 調査にあたって、高知県土木部公園下水道課、高知県南国土木事務所ならびに野市町教育委員会、地元大谷地区には、多大な御援助、御協力をいただいた。また、現地調査及び整理作業では下記の方々に種々御協力をいただいた。末筆ではあるが厚くお礼申しあげたい。

（現地調査） 高知県南国土木事務所工務第一課公園緑地班（地形測量等）
有限会社 伊野ボーリング工業（地質調査）

（整理作業） 株式会社 京都科学（保存処理）
山中美代子、山本裕美子、山本利恵（遺物実測・整図）

本文目次

I 調査に至る契機と経過	1
II 大谷古墳の位置と環境	3
III 調査の概要	8
IV 遺物	17
V まとめ	27

挿 図 目 次

第1図	大谷古墳位置図	2
第2図	周辺遺跡（古墳時代）分布図	5
第3図	大谷古墳周辺地形図（500分の1）	7
第4図	石室平面実測図	9
第5図	石室内土層堆積状態図	11
第6図	墳丘土層断面図	12
第7図	石室実測図	13~14
第8図	石室床面下平面図	16
第9図	石室埋土中遺物出土状態図	18
第10図	石室床面遺物出土状態図	19
第11図	石室内出土土器実測図	21
第12図	石室内出土鉄器・馬具実測図	23
第13図	石室内出土馬具（轡）実測図	24
第14図	石室内出土装身具（耳環・玉類）実測図	25
第15図	大谷古墳石室プラン図	31
第16図	舟岩1・5号墳・枝川1号墳横穴式石室	32

表 目 次

第1表	土器（須恵器）観察表	20
第2表	耳環計測表	25
第3表	玉類計測表	26

写真1	(上) 玄室・奥壁側 (下) 玄室・羨道側	大崎山古墳石室
2	(上) 大谷古墳調査前の状況（袖石上部と右側壁上段の積石が露出・南から） 石室確認状態（北東から）	
3	石室内土層堆積状態（奥壁側から）	

巻頭写真1	石室全景
2	(上) 耳環、玉類 (下) 赤色顔料付着の須恵器杯身（内面）

図 版 目 次

- P L 1 (上)遠景(東から、矢印の位置)、(下)古墳遠景(南から、矢印、古墳)
- P L 2 (上)調査前近景(南から)、(下)同上(西から)
- P L 3 (上)石出検出状態(北東から)、(下)調査風景(北から)
- P L 4 (上)石室内堆積土除去後(南から)、(下)馬具(轡)出土状態(南西から)
- P L 5 (上)調査風景(南西から)、(下)遺物出土状態(袖部、北西から)
- P L 6 (上)遺物出土状態(袖部、南東から)、(下)同上(北東から)
- P L 7 (上)遺物出土状態(左側壁、羨門部、北から)、(下)同上(北西から)
- P L 8 (上)遺物出土状態(I、北から)、(下)耳環出土状態(北から)
- P L 9 (上)石室全景(南から)、(下)同上(南東から)
- P L 10 (上)全景(羨道側から)、(下)同上(南東から)
- P L 11 (上)右側壁(南から)、(下)左側壁(西から)
- P L 12 (上)奥壁(南西から)、(下)羨門(東から)
- P L 13 (上)右袖部(南から)、(下)調査風景(北東から)
- P L 14 (上)全景(北東から)、(下)石室掘形検出状態(東から)
- P L 15 (上)石室全景(南東から)、(下)墳丘全景(西から)
- P L 16 (上)墳丘立割状況(北西から)、(下)墳丘断面(北から)
- P L 17 (上)出土土器(須恵器)
- P L 18 (上)保存処理前、(下)保存処理後、鉄器(鉄鏃)
- P L 19 (上)保存処理前、(下)保存処理後、鉄器(鉄鏃、刀子)、馬具、釘
- P L 20 (上)保存処理前、(下)保存処理後、馬具(轡)
- P L 21 (上)耳環、(下)馬具(轡)
- P L 22 (上)玉類(勾玉、切子玉、ガラス小玉)(下)赤色顔料付着の須恵器杯身(P 8、内面)

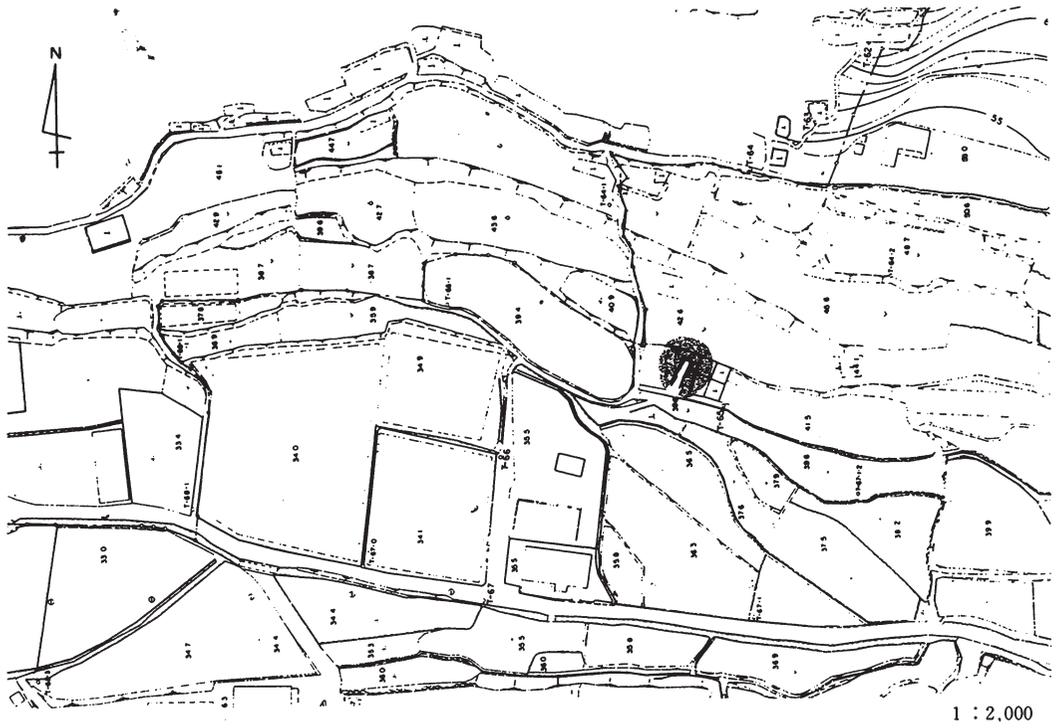
I 調査に至る契機と経過

古墳の所在する野市町大谷1395番地周辺は、金剛山（三宝山）頂部から西に派生した尾根と南西に派生した尾根とによって狭まれた開析谷である。この谷部は、野市町中心街の北東部に近接し、観光名所でもある竜河洞（土佐山田町大字逆川・国指定天然記念物、史跡）へ至る竜河洞スカイラインの入口に隣接するなど、交通・観光面での地理的利便性に優れることから、観光・産業関連施設の適地とみなされていた。高知県では、県の重要施策の一環である国民休暇県構想のなかで、動物公園を含む総合公園の建設計画について検討作業を進めた結果、野市町中央北部に位置するこの谷部を選定し、県立野市総合公園として平成元年度から建設工事に着工する運びとなった。

高知県遺跡詳細分布調査の香美・長岡郡ブロック分布調査として、昭和63年～平成元年度にかけて野市町内の遺跡踏査を行っていた高知県教育委員会及び野市町教育委員会では、野市町大谷482番地の大谷神社周辺地で古墳・平安時代の土器片等を表面採集し、遺物散布地が所在することを確認していた（大谷遺跡）。しかし、古墳の所在するこの谷部については、現地踏査時に遺物の散布が認められず、古墳の墳丘等の確認もできなかったことから、平成元年4月の段階では古墳等の遺跡の所在は確認されていなかった。

公園建設に伴う墓地移転等の準備を進めていた高知県土木部及び高知県南国土木事務所では、野市町大谷1395番地の墓地脇に、墓所とみられる低い高まりが所在することを確認していた。このため、平成元年4月25日に高知県土木部から高知県教育委員会に遺跡所在地の有無についての照会があった。これを受けて高知県教育委員会では野市町教育委員会と連絡調整を行い、現状では古墳とは断定し難い面があるものの、五輪塔などの散布もなく中～近世墓以外の墓地であることが考慮されることや、地元に「古墳」の伝承が残されていること、祠をもち、「ベザイテンさま」と呼称されて信仰の対象となっていたことなどから、「古墳状隆起」として扱い、高知県土木部と具体的に協議を図ることにした。その後、同年6月7日に、現地の草木除去を行い腐植土を除去してボーリング棒による確認等を行った結果、横穴式石室玄室の奥壁部及び側壁の一部が検出され、天井石及び側壁上部・羨道部が破壊されているものの、横穴式石室をもつ後期古墳が遺存していることが確認された。

古墳確認により、高知県教育委員会は高知県土木部と再度協議を図り、野市町教育委員会の協力を得て、平成元年7月11日～8月19日の間に発掘調査を実施した。また、平成2年度に(財)高知県文化財団が高知県の委託を受けて出土遺物等の整理作業を行った。なお古墳は、工法等の変更が困難なため現状保存には至らなかったが、同公園内に移築復元される計画である。



第1図 大谷古墳位置図

Ⅱ 大谷古墳の位置と環境

大谷古墳は、高知県香美郡野市町大谷1395番地に所在する。野市町は、高知県のほぼ中央部、高知平野の東部に位置し、面積22.90km²、人口約13,900人を数える。町の西側には一級河川物部川が南流し、北側は四国山脈へと至る尾根部が南西方向に派生している。平野部は、物部川の形成による沖積扇状地及び開析扇状地で、なかでも開析扇状地が良く発達している。古墳所在地は、町中心街の北西約900m、金剛山（三宝山・標高213.9m）山頂部から西及び南西に派生した丘陵によって挟まれた開析谷の北側斜面部に位置しており、野市町役場（北緯33度33分38秒・東経133度42分13秒）の北西約700m、物部川左岸から約2km、現海岸線から3.7kmの距離を測る（第1・2図）

古墳周辺の標高は40～45m前後で、開析谷の平坦部との標高差は10～15m前後である。古墳の立地する丘陵部は、地殻変動による隆起地形で基盤岩はチャートを主体とする。基盤上部には礫質崖錐性のチャート風化土（土石流質）が厚さ約3～4mで堆積し、その上部には砂礫土（洪積層）が約3mの厚みで、また表層には黒ボク（沖積層）が約1m前後の厚みで堆積している。なお、古墳所在地の東側及び南側には仏像構造線が形成され、横ずれ断層による帯状構造線が認められている¹⁾。

大谷古墳は、今回の調査によって発見された後期古墳であるが、野市町内には溝淵山古墳・上分古墳・小山谷古墳・日吉山古墳群・父養寺古墳・大崎山古墳等の横穴式石室を有する後期古墳の所在が知られている。また、古墳時代後期（6C後半～7C前半）の集落跡として深淵遺跡が、古墳時代遺物散布地として西野遺跡群・大谷遺跡等が知見されている。（第2図）

深淵遺跡は、物部川左岸の微高地上に立地し、昭和62・63年の調査によって弥生・古墳時代の竪穴住居址・土坑・溝等、奈良～平安時代の掘立柱建物址・柵列・土坑・溝等が検出されている²⁾。このうち、古墳時代の遺構としては竪穴住居址4棟、掘立柱建物5棟、柵列2列、土坑3基、溝7条等が検出され、6世紀中頃～後半から7世紀にかけての集落の様相が明らかにされた。特に6世紀後半を境として、住居構成が竪穴住居と掘立柱建物の併存となり（Ⅱ期、TK43段階）、6世紀後半～7世紀にかけては（Ⅲ～Ⅳ期）、掘立柱建物が主流となること等が確認されている。³⁾深淵遺跡は、大谷古墳をはじめとする周辺の後期古墳築造期に営まれた集落であり、集落と後期古墳の被葬者との関連を探るうえで重要である。後期古墳の分布からみれば、現在の東佐古・母代寺及び父養寺・大谷、西野、深淵・本村、兎田、中山田、曾我の地域を基盤とした大別して4グループからなる集団が存在していたことが推察される。後期古墳所在地を墓域とした集団の動向については、平野部の集落跡及び遺物散布地の調査が進められるなかで明らかにされるものと期待される。



玄室・奥壁側



玄室・羨道側

大崎山古墳（写真1）



1 : 50,000

番号	遺跡名	所在地	番号	遺跡名	所在地	番号	遺跡名	所在地
19-104	日吉山古墳群	野市町西佐古日吉山	131	東野土居遺跡	◇ 土居1227-1	154	池の本古墳	◇ ◇ 2031他
105	父養寺古墳	◇ 父養寺	135	平井遺跡	◇ 字北崎723	157	岡ノ芝遺跡	◇ 山地866他
108	深測北遺跡	◇ 深測字ヤノカウ	136	野口遺跡	吉川村吉原西木戸 字西野口他	162	棒ヶ谷古墳	◇ 下分268他
109	深測遺跡	◇ 字殿ノ内・ 神ノ木34他	139	浜口遺跡	◇ 吉原浜口字 住吉島	163	嗚呼1号墳	◇ ◇ 2686-1他
112	西野遺跡群	◇ 西野1309・ 1509・1531他	140	南中曾遺跡	◇ ◇ 字南中曾	164	嗚呼遺跡	◇ 徳王子刈谷
118	大谷古墳	◇ 大谷1395	143	ハザマ遺跡	赤岡町2157-1~2169-1	169	徳善天皇古墳	◇ ◇ 1365-2他
119	大谷遺跡	◇ ◇ 482	145	大東遺跡	◇ 2246~2249, 2257	15-311	上分古墳	野市町東佐古字上分
121	★(竹ノ内山古墳) 瀧河山古墳	◇ 母代寺字 瀧河山665	146	江見遺跡	◇ 1074	312	★小山谷古墳	◇ ◇ 字 小山谷1433
126	大崎山古墳	◇ 本村奥ヶ谷	149	宮の西遺跡	香我美町山北 十番1919他	・『高知県遺跡地図 香美・長岡ブロック』 平成2年3月 高知県教育委員会による ・遺跡番号は同地図番号に準拠する。		
129	曾我遺跡	◇ 中ノ村曾我	150	宮の前遺跡	◇ ◇ 1922-1他			

第2図 周辺遺跡(古墳時代)分布図

★町史跡



大谷古墳調査前の状況（袖石上部と右側壁上段の積石が露出・南から）



石室確認状態（北東から）

（写真2）



1 : 500

第3図 大谷古墳周辺地形図

Ⅲ 調査の概要

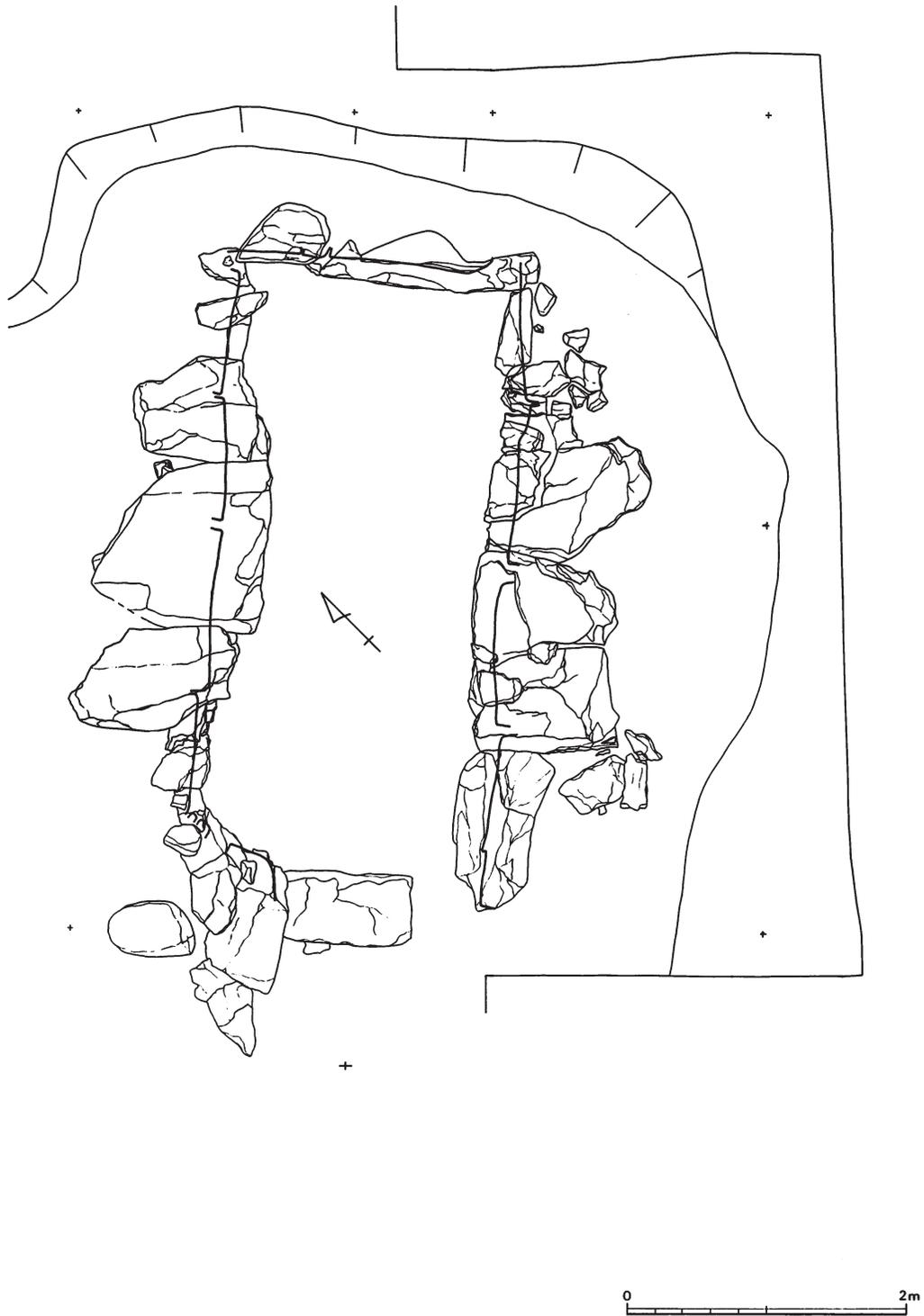
1. 調査の内容

調査前の大谷古墳は、墓地横の荒蕪地であり、周辺地形に比べて僅かに小高くなっていたものの、墳丘とみなされる外形は遺存していなかった。また、横穴式石室の痕跡をとどめる石材抜取痕等もみられず、外観としては古墳所在の有無について不明瞭な状態であった。雑草に覆われた地表面には、「ベザイテンさま」の小祠にかかわる近・現代の瓦片・陶磁器片等が散在し、一見、墓地・塚跡のような状況を呈していた。旧土地所有者・地元古老等からの聞き取りによれば、「古墓・塚跡とみられる」との内容であり、古くから地元では「古墳または墓所」として伝承されていた。「ベザイテンさま」の信仰の由来と小祠が置かれた理由については明らかではないが、墓地化されずに開墾も行われていないところをみると、永らく「禁墾地」として認識されていたようである。

古墳所在地を含む谷部の開発計画によって、古墳の確認調査を行うことになり平成元年6月7日に実施した。この調査では、対象地の草刈作業を行い、ボーリング棒による確認と併せて表土の一部を除去し、石室の所在についての確認を試みた。草刈り作業後に、石英粗面岩（珪石）の立石の上部と、石材とみられる砂岩石が露出し、横穴式石室が遺存している可能性が強まった。(写真2上段) ボーリング棒による試錘によれば、表土下に石材露出部を側とする石列が認められることから、この石列を横穴式石室の西側壁上部とみなし、さらに石列確認部の表土を除去し、石列の輪郭についての検出を進めた。その結果草刈り後に露出した立石は袖石の上部であることが判明し、西側壁及び奥壁・東側壁を検出して、玄室上部及び羨道部が破壊されてはいるが、横穴式石室をもつ古墳が存在することが確認された。古墳は、土地の大字名を採用して「大谷古墳」と呼称することとし、工事に先立つ事前の発掘調査を行うことにした。なお、古墳の立地する谷部について、再踏査を繰り返し行ったが、大谷古墳以外の古墳の所在について確認するには至らなかった。

本調査は、平成元年7月11日～8月19日の間に実施され、玄室及び羨道部の精査と、石室周辺部における墳丘遺存範囲の確認を行った。また、石室掘形・墳丘及び石室構築の内容について確認するため、石室主軸に平行及び直交するトレンチを設け、地山面までの掘り下げを行った。また、石室周辺を4分割して表土等を除去し墳丘残丘部の確認を行った。

調査後、将来の石室移築復元のため、石室構築に使用された石材を搬出し、調査地近くの野市運動公園の一隅に移設した。

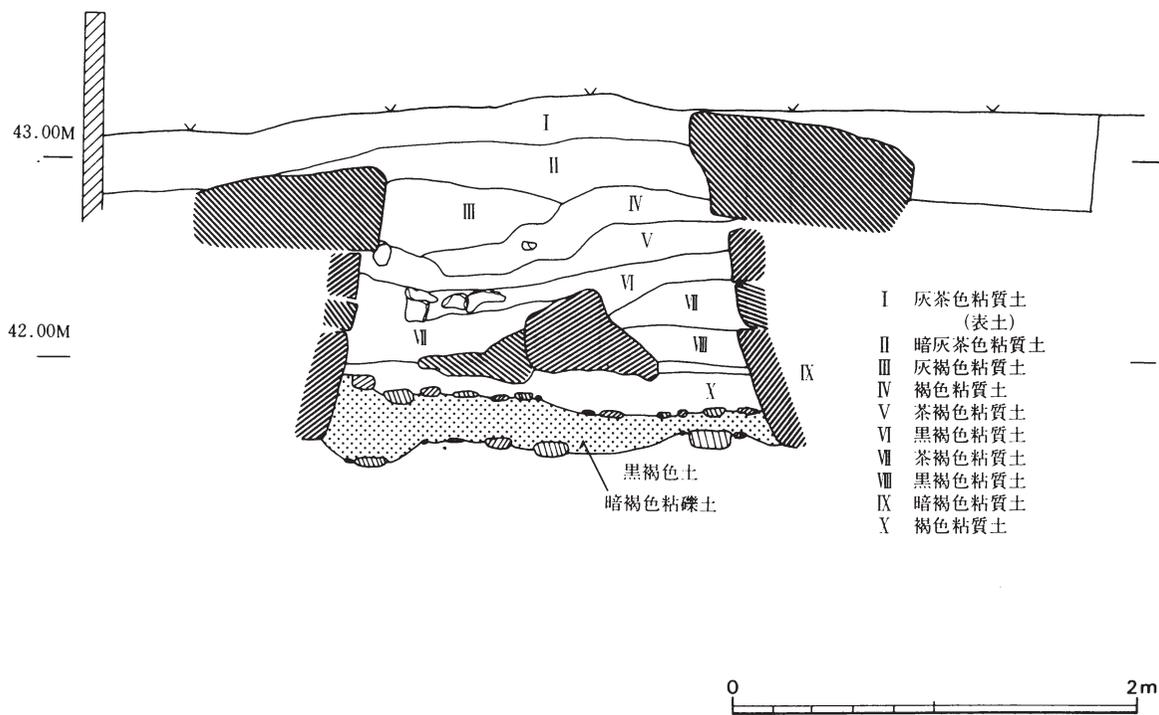


第4图 石室平面图



石室内土層堆積状態（奥壁側から）

（写真3）



第5図 石室内土層堆積状態図

2. 墳丘

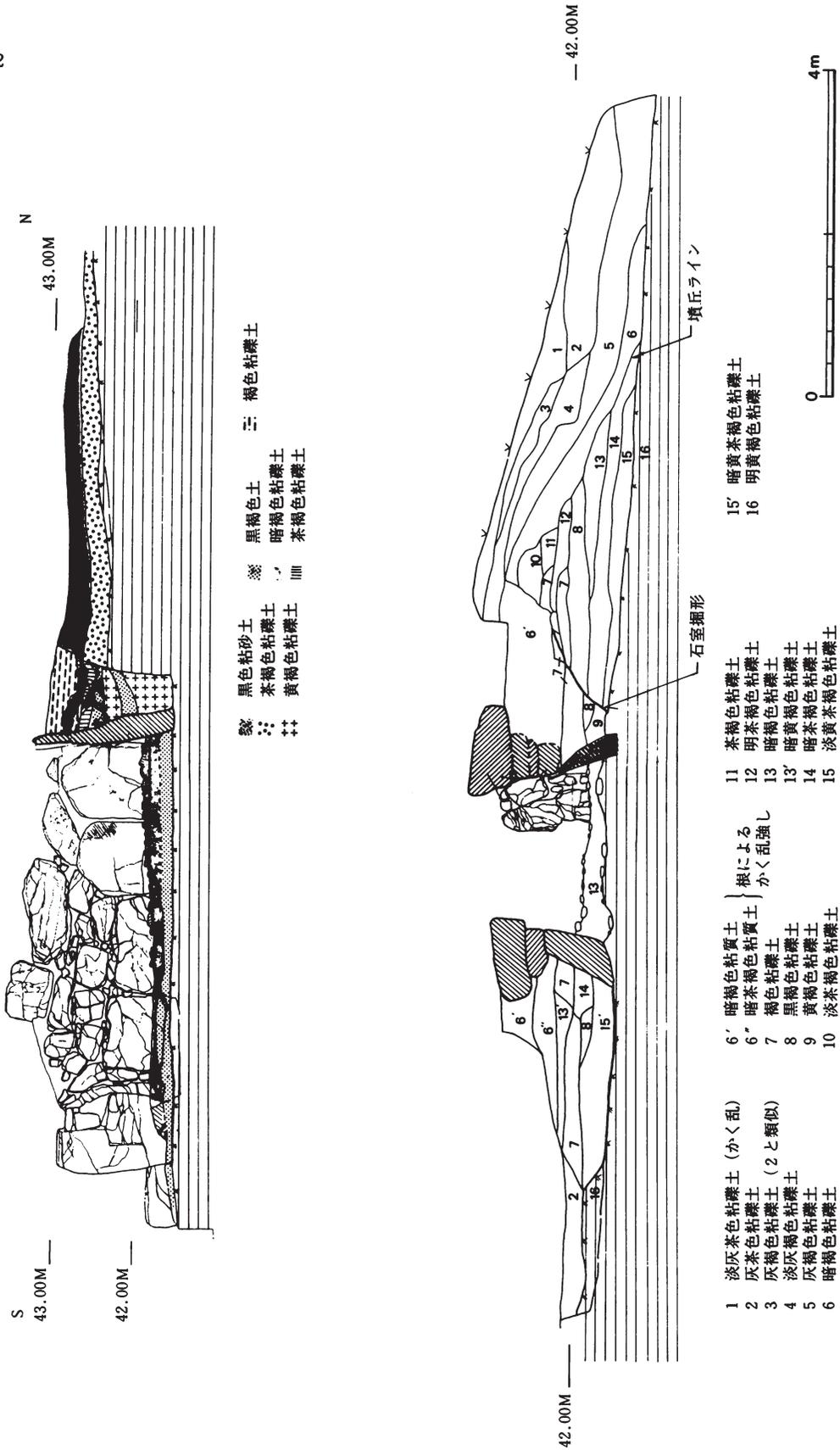
古墳は、標高41.0m～43.50mを測る丘陵南西斜面に築かれている。墳丘は、後世の削平等により改変をうけ、調査時には既にその原形をとどめていなかった。(第1図下段・第3図)

斜面部へのトレンチ調査などにより、当初の墳丘築造に伴う盛土が検出され、墳丘の残丘部が確認されている。この残丘部は、石室の西側及び東側で認められたもので、石室北側では遺存しない。残丘部の遺存範囲は、石室主軸ラインから計測して西側で6.4m、東側で4.1mの範囲である。残丘部は第7・8・10～15層の盛土層からなる。このうち第14層・暗茶褐色粘礫土は比較的硬質であり、その西端部は地山土(第16層・明黄褐色粘礫土)に盛られている(第6図)。墳丘ラインを示す石列・溝等の外部施設は検出されていないが、この第14層の西端部が当初の墳丘ライン裾に近いものとみなされる。

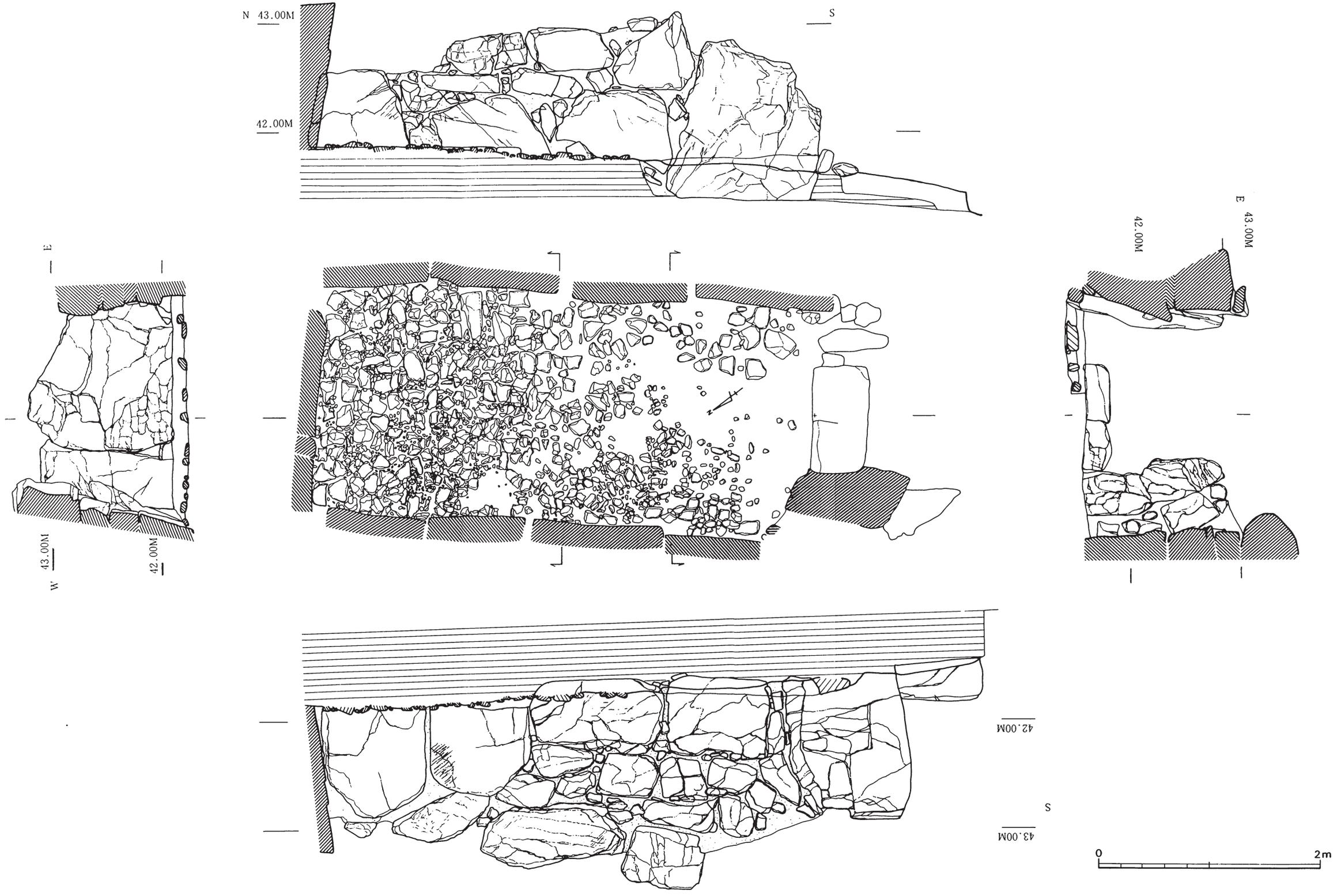
墳丘の築造過程については、トレンチ調査による土層断面観察によって、部分的ながら復元することができる。その過程を述べると、まず、丘陵斜面傾斜地に直交してハ字型に地山を掘削し、平坦部を設ける。次にその排土等を利用して西側に、第12層～第15層段階までの盛土を施す。奥壁側から西側壁・東側壁へと基底石を配する。西側壁の基底石配置に際しては、盛土の一部を穿ってΓ字型の掘形を形成する。掘形と基底石間に裏込めを施す。なお、東側壁側では、基底石上端部まで裏固めを行いつつ盛土する。基底石上部では旧地表面と平行に高さ合せを施した後、側壁上段の石積を行う。墳丘上部を形成して天井石を構築する。石室上面に最終的な被覆を行い、盛土を加えて墳丘墳頂部を形成する。以上、推測を混じえつつ墳丘築造過程を再現してみた。側壁上段部の墳丘築造過程については、第6'・6"層が根によるかく乱を受けた腐植土で判然とせず、盛土の細別による観察を行うことができなかつた。本来の盛土の築成状況としては、第6図に第6'・6"層と表現された内容ではなく、第7層・10・11層等の堆積土により丹念に盛土されていたものと推察される。

墳丘の築造状況で明らかのように、本墳では墳丘築成を行いつつ石室を構築している。斜面部をハ字型に整形したうえ傾斜をもつ片側の低い部分に盛土を施して墳丘基盤を形成し、石室構築にあたっては盛土の一部を穿って石室堀形としている。地形的には、築造当初の旧地形は南西方向への傾斜をもつ斜面であったとみられ、石室の縦断面で観察されるように、石室掘形のうちの奥壁側は石室基底面から約70cm程(遺存高)の高低差をもっている(第6図上段)。墳丘築造過程からみれば、側壁側の盛土を穿って石室掘形とするなど石室構築に際して旧地形による制約を受けたことが考慮される。石室の主軸方位が南西方向であることを考えれば、築造場所を南西斜面に選定し、地形制約による古墳築造条件を克服しつつも、石室開口方向を南西として意図がうかがわれる。

古墳の規模については墳丘残丘部からの類推によらざるを得ない。墳丘の中心地点については明確ではないが、仮に玄室中央部を中心点として復元した場合、径12m前後の円墳であったと推定される。



第6図 墳丘土層断面図



第7図 石室実測図

3. 石室

主体部はN45°Eの主軸方向をもつ右片袖式の横穴式石室で、南西方向に開口する。玄門部に立石を据えて袖石とし、玄室と羨道の間に仕切り石（障石）を配して区画する。（第4・7図）

石室の平面形は長方形を呈し、玄室長4.5m、羨道長1.4m（遺存長）、全長5.9mを測る。玄室幅は奥壁側で2.04m、玄室中央部で2.06m、玄門部で2.16mを測り、東側壁の玄門部側で若干東に開く。羨道部が東壁・西壁が失なわれているため明確ではないが、玄門部付近で羨道幅1.3mを測る。玄門部の袖幅は、玄室内で0.7mを測る。

奥壁は比較的大型な石を用いて腰石にしている。東側には幅1.2～1.4m・高さ1.5～1.7mの大石を、西側には幅0.6～0.7m・高さ1.2～1.5mの長方形の石を、旧地表より深さ5～7cm程度掘り下げて据えている。石材は硬質砂岩で、約80°の角度で内傾する。側壁との接合面は、東側壁で鈍角、西側壁で直角を呈する。

側壁は、長辺0.9～1.2m・短辺0.6～0.7m大の大石を用いて基底石とする。西側壁では奥壁側から数えて二枚目までの基底石を縦に据え、東側壁では玄門部近くに長辺1.45m、短辺1.35mの大石を据える。玄門部の袖石は、右片袖式で西側壁側に据えられ、長辺1.5m・短辺1.1mの石英粗面岩（珪岩）を用いて立石としている。東側壁では、基底石間の隙間に角礫を充填し、基底石上部に石材を横積みする。奥壁側基底石上面の高さで、横目地が認められる。西側壁は奥壁側基底石と玄門部袖石上面の高さにあわせて、石材を横積みする。袖石と西側壁間の隙間には長方形の石材を充填する。玄門部袖石上面の高さで横目地が認められる。側壁の傾斜角としては、東側壁は、石室中央部で約80°の角度で内傾し、また西側壁は約75°の角度で内傾していた。なお西側壁では、奥壁側二枚目の基底石が玄室内に強くせり出し、壁体のゆがみが観察された。

天井石を欠くことにより、玄室高は明確でない。ただ、西側壁四段目の積石が天井石下に近い積石と仮定すれば、玄門部袖石上に楣石を托据え、その上部に天井石を構築した状況が推察される。四段目の積石の上面を手掛りにして検討すれば、玄室床面からの天井高は約1.8m前後と復元される。

石室内へは、10層に区分される土砂が流入堆積していた（第5図I～X）。第X層上面に、側壁の石材が落下しているところから、早くから石室崩壊が進んでいたと考えられる。第X層中から、須恵器・鉄器・馬具・耳環・玉類等の副葬品が出土し、（第9・10図）、第X層下・暗褐色粘礫土上面で礫床が検出された。礫床（敷石）は、2層に区分される石室掘形内整地土上に布敷されていた。整地土の厚みは、奥壁側で約35cm・石室中央部で約20cm・玄門部で約30cmを測る。礫床（敷石）は、拳大の角礫を配したもので、奥壁側では玉石混じりである。奥壁側が丁寧に布敷されているのに比べて、中央部及び玄門部は散在していた。なお、排水溝等は検出されなかった。



第8图 石室床面下平面图

IV 遺物

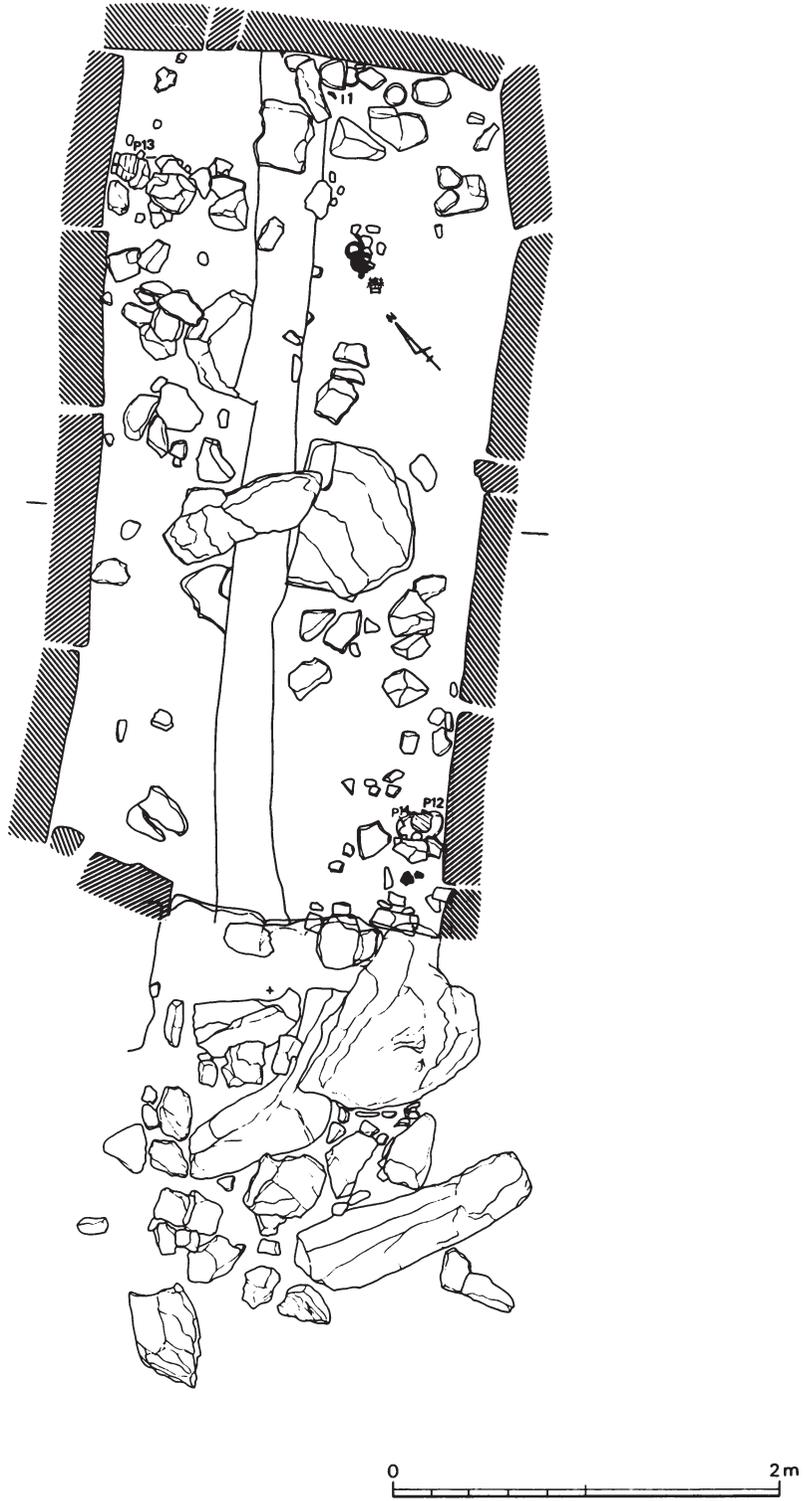
1. 遺物の出土状況

石室内は、全面にわたり土砂が堆積していた。床面確認のため土層序を確認しつつ、石室下面へと精査を行った（第5・9図）。石室内堆積土のうち、I～VI層は近・現代の瓦片・陶磁器片を含み、明らかに石室上部の破壊後、流入堆積した土である。第VII層除去中に石室内への落下石が検出され、第X層・褐色粘質土上面において石材の散乱が確認された。第X層下からは、倒壊した石材は検出されず、床面が検出されることから、第X層堆積時までは天井石を含む石室上部が存在し、以降に石室上部の破壊が行われたとみられる。第X層に至るまで、石室内においては天井石に使用されたとみられる大型の石材は検出されず、石室上部の自然崩壊よりもむしろ、人為的に天井石を含む石室上部の石材が持ち運ばれた可能性がもたれる。

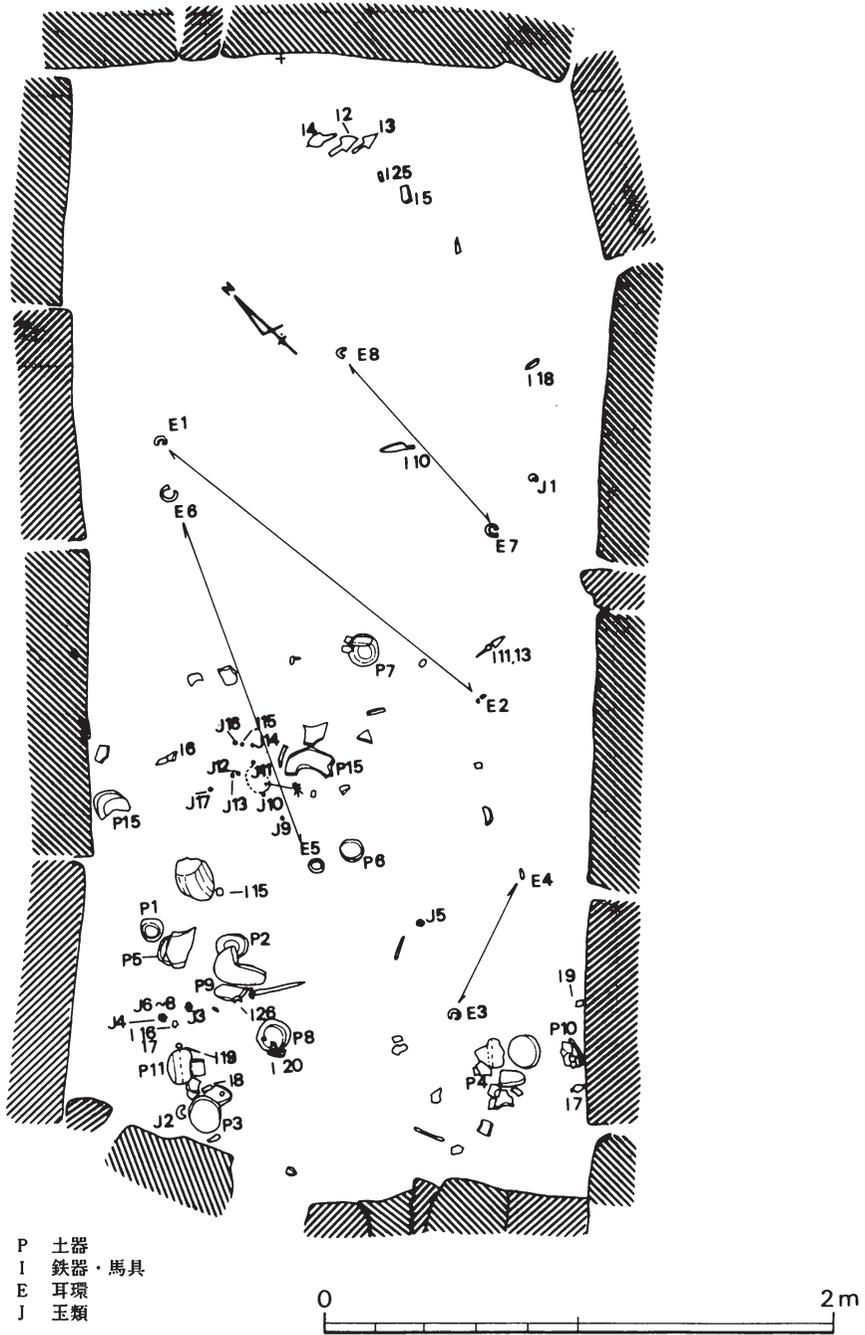
第X層上面の石材を除去する過程で、石室奥壁から鉄鏃（I1）・西側壁奥壁部で須恵器壺（P13）・奥壁寄り馬具（轡）・東側壁玄門部寄り須恵器壺、台付長頸瓶（P12・14）が出土した。（第9・11～13図）。また、羨道部の落石下で須恵器壺片が散在して出土した。（P16）。

第X層・褐色粘質土を掘り下げる段階で遺物が出土し、礫床（敷石）が検出されて須恵器・鉄器・馬具・耳環・玉類が出土した（第10～12・14図）。第X層を分層し、さらに遺物出土状態面から数次にわたる埋葬面を確認することはできなかった。第10図で図示した遺物出土状況は、石室床面である礫床（敷石）上面から第X層下部にかけての遺物出土状態を示すものである（第5・7・10図）。

遺物は、石室内に散在する状態ではなく、ある程度のまとまりを残す。遺物の集中範囲は、玄室奥壁・玄室中央部西側・玄門部袖石周辺・東側壁玄門部側である（第10図）。まず、玄室奥壁では鉄鏃（I2～5）・弾金具（I25）が、玄室中央部西側では須恵器杯身（P6・7）・壺（P15）・鉄鏃（I6）・ガラス小玉（J9～16）と朱（水銀朱か）の散布が認められる。第X層中から出土した鉄鏃（第9図・I1）は、その出土位置からI2～5に伴うものと考えてよさそうである。また、玄室中央部西側における朱の散布範囲（10×12cm）とガラス小玉の集中は注意される。玄門部袖石周辺では、須恵器杯蓋（P1～3・5）・杯身（P8）・壺（P9・11）・鉄鏃（I8）・鉄釘（I16・17・19）・勾玉（J2）・切子玉（J3・4・6～8）が、東側壁玄門部側では須恵器杯蓋（P4）・鉄鏃（I7・9）が出土している。このなかで、玄門部袖石周辺の須恵器類・勾玉・切子玉の集中は留意される。また須恵器杯身（P8）の内面には朱（水銀朱か）が付着していた。東側壁玄門部では、第X層中の須恵器類（P12・14）は出土位置からP4等に伴う遺物であるとみられる。耳環類は、玄室中央部周辺（E1・2・5～8）・東側壁玄門部側（E3・4）で計8点出土している。しかし、形状・厚み等から対になるとみられる耳環は、玄室側壁の東側と西側に離れた状態で出土している。



第9図 石室埋土中遺物出土状態図



第10図 遺物出土状態図

遺物の出土位置が、埋葬時の位置をそのまま反映しているものでないことは、追葬時の取り片付けなどを考え合えると容易に理解できる。出土遺物の多くが原位置から遊離しているものと考えられ、遺物の集中内容が埋葬時の副葬量・セット関係等を示すものでないことは明らかである。しかし、上述した如く、玄室内における遺物のまとまりは、偶発的な要因に基づくものではなく、埋葬時及び追葬時の玄室の状態を示唆するものと考えておきたい。玉類及び朱の散布位置・耳環類のうちE3・4の位置・土器類及び鉄器類の出土状況から、推論ではあるが、少くとも奥壁側に1体・西側壁側に2体・東側壁側に1体の計4体の埋葬が考えられ、羨道部の内容が不明である点も考慮して本墳では4体以上の埋葬が行われていたと推定したい。

2. 遺物の観察

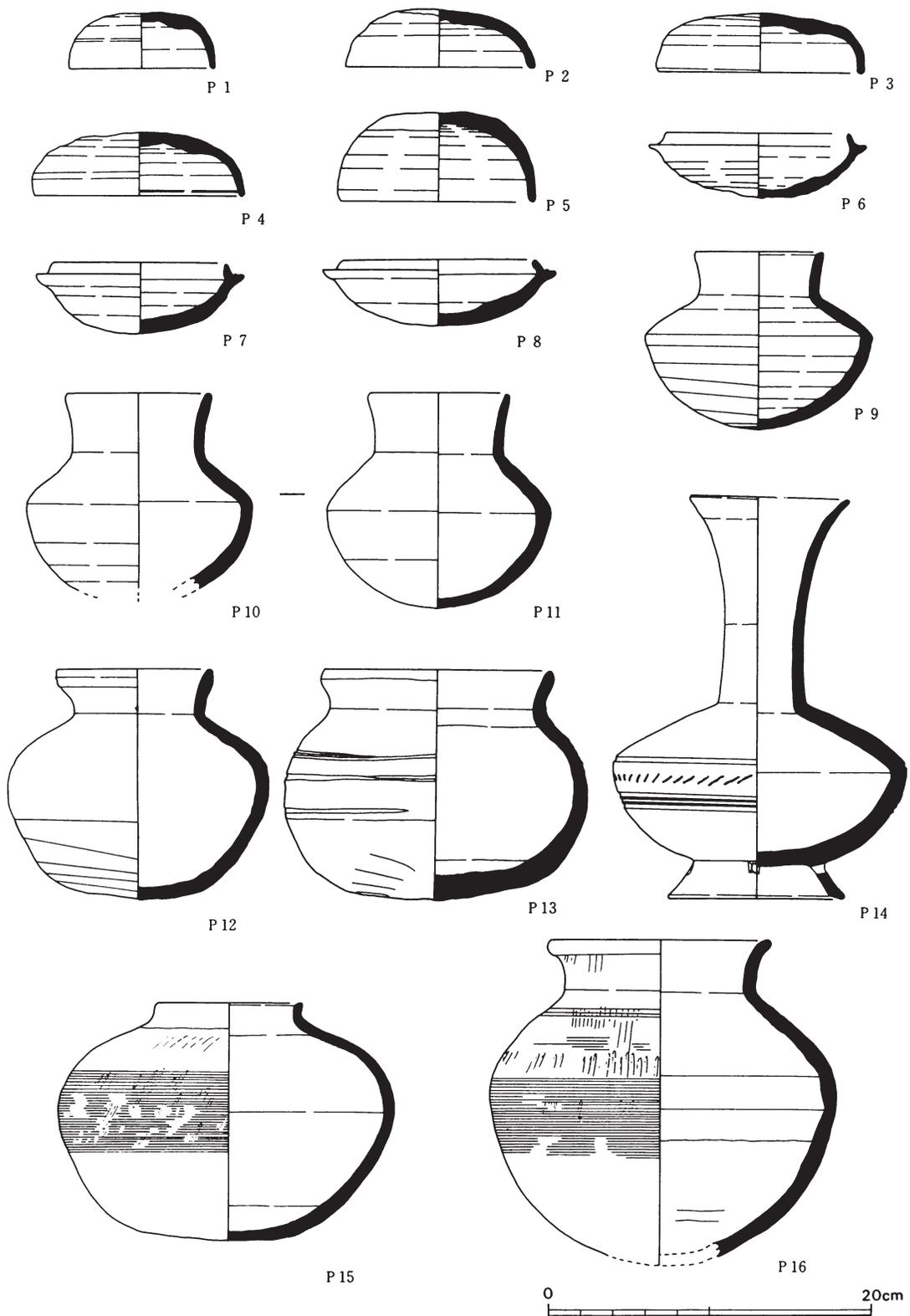
土器（須恵器）（第11図・P L17）

須恵器蓋（P1）・杯蓋（P2～5）・杯身（P6～8）・壺（P9～16）が出土した。杯類は、形態・成形技法等の特徴から、二及三時期に細分できる。P3・4・8は出土杯類のなかでも古く、陶邑編年Ⅱ型式第4段階⁵⁾以降・田辺編年TK43～209型式⁶⁾に、P2・5～7は天井部及び底部外面がヘラ切り未調整で田辺編年TK209～217型式に位置付けられる。壺類は、P9・10・15・16が前者に、P12～14が後者の時期に比定されよう。須恵器類は、大別して6世紀後半～6世紀末・7世紀初頭～7世紀前半に所属すると考えられる。

第1表 大谷古墳出土土器計測表

(単位mm)

番号	種類	形態	全高	口径	胴幅	胎土	焼成	色調	備考
P-1	須恵器	杯蓋	35	89		良	良	灰色	
P-2	〃	〃	36	118		小砂粒含む	良	灰白色	天井部ヘラ切り未調整
P-3	〃	〃	37	128		良	良	青灰色	内面横ナデ
P-4	〃	〃	40	130		良	良	灰色	口縁部の一部焼けひずみ 内面横ナデ
P-5	〃	〃	56	122		良	良	灰白色	やや軟質 天井部ヘラ切り未調整
P-6	〃	杯身	41	114		良	良	灰白色	底部外面ヘラ切り未調整
P-7	〃	〃	43	106		良	良	灰白色	底部外面ヘラ切り未調整
P-8	〃	〃	41	120		良	軟良	灰白色	軟質 内面に赤色顔料付着
P-9	〃	壺	110	80	141	良	良	灰色	
P-10	〃	〃	122以上	90	141	良	不良	暗灰白色	P11と同一個体の可能性あり
P-11	〃	〃	134	88	140	良	良	灰色	P10と同一個体の可能性あり
P-12	〃	〃	144	94	163	小砂粒含む	良	青灰色	
P-13	〃	〃	144	140	188	良	良	青灰色	胴部にヘラ状工具による沈線 底部ヘラ切りの上をナデる
P-14	〃	台付長頸壺	253	98	182	良	良	灰色	底径108 台に四方向の透し孔
P-15	〃	壺	148	90	209	良	良	灰色	
P-16	〃	〃	197	136	215	良	良	灰色	



第11图 石室内出土土器（須恵器）实测图

鉄器 (第12図・P L 18.19)

玄室内より直刀 (I 12・15) 鉄鏃 (I 1～9・24)・刀子 (I 10・11・13・14)・鉄釘 (I 16～19)・弾金具 (I 25) が出土した。

直刀としては、茎の破片 (I 12) と鞘尻金具 (I 15) で、I 12から平造りの直刀であったとみられる。鞘尻金具は、柄尻に径2.5×3 cm、長さ2.7cmの金具をはめ、幅5.5mm・長さ3 cmの鋸を中央部に打ち込んで固定したものである。金具内面に、部分的に木質が遺存していた。鉄鏃 (I 1～9・24) は、広根式で、形態から柳葉広鋒式 (I 1～6)・斧箭式 (I 7～9) に大別される。I 1～6の茎は断面方形で、刃部は両丸造りである。I 7～9は平造りの刃部を持ち、茎の断面は方形である。鉄鏃の遺存度は良好である。刀子は、(I 10・13) と (I 14・10) の2本で、前者は完形で全長15.1cm・刃幅1.1～1.5cm・背幅4～6 mmを測り両関である。また、後者は片関で刃幅1.2cm・背幅3～5 mmを測る。鉄釘 (I 16～19) は、方形の断面をもち頭部及び先端部は欠損している。現存長2.9～8.3cmで、幅0.4～0.7cm・厚さ0.1～0.4cmを測る。I 25は、円棒の両端に半球状の頭を有したもので弾金具とみられる。⁷⁾全長3.2cm・中央部幅4～5 mmを測る。

馬具 (第12・13図、P L 19～21)

鈎具 (I 20) 幅3.1～3.6cm・長さ7.0cm・厚さ6 mmを測る。刺金を欠く。断面は楕円形を呈する。

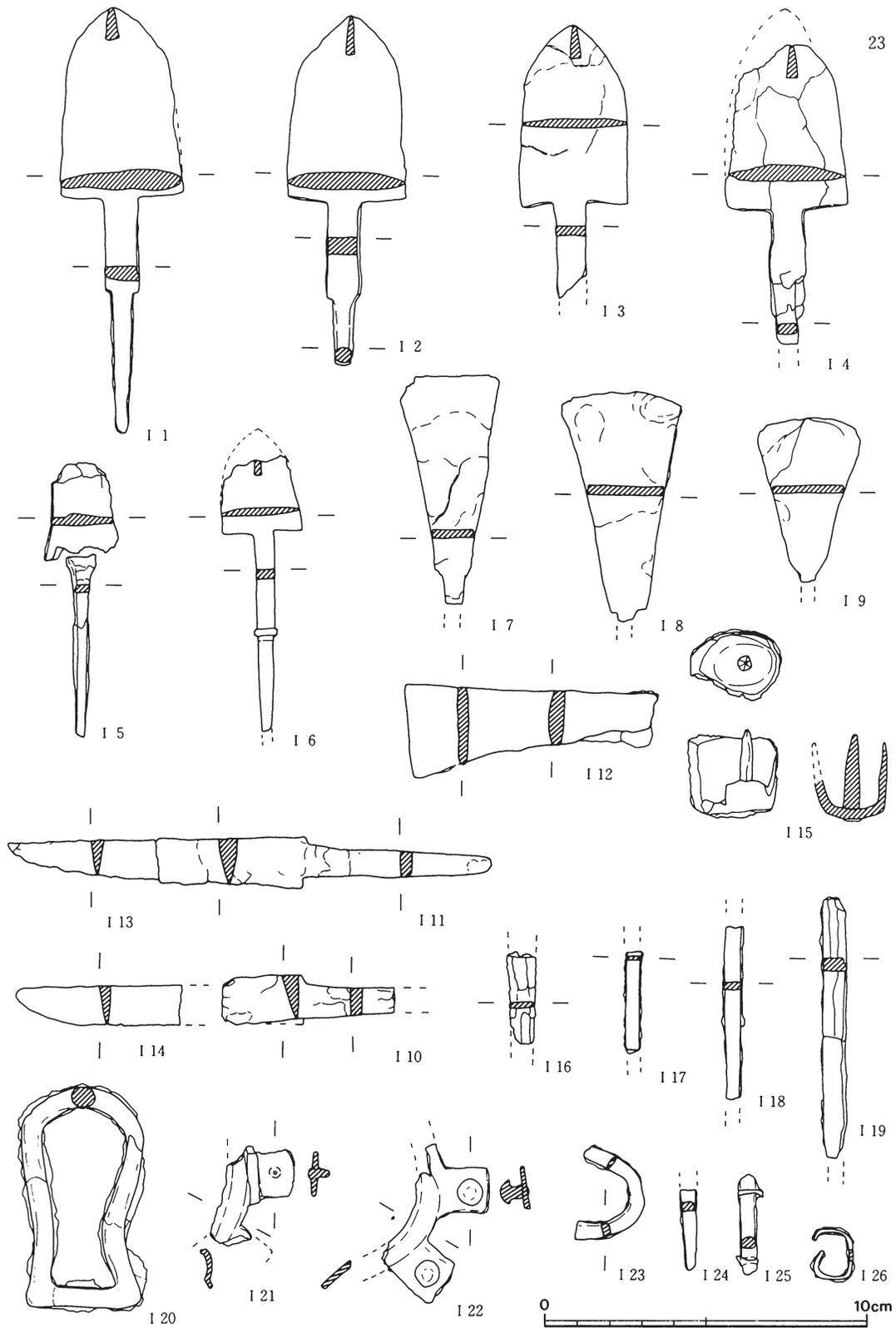
雲珠 (I 21・22) 脚部の破片で残存状況は悪い。脚は2脚が遺存し、脚間の間隔から8脚に復元されよう。脚中央部に径8 mmの鋸1個を持つ。鉢部は欠損し明確ではない。

轡 (第13図) 引手、鏡板、銜が出土した。銜の遺存度は良くないが、先端は径3.4cm・幅6 mmの環によって鏡板、引手と連結している。引手は、長さ16.7cmで一端は円環によって鏡板・銜と連結し、手綱側の端は外側へと緩く曲げられている。鏡板は、7.51cm×8.91cmを測る楕円形の素環で、断面は厚さ9 mmの円形を呈する。立間は造り出さないが、字型の金具を折り曲げて二連にした環を鏡板に取り付けている。

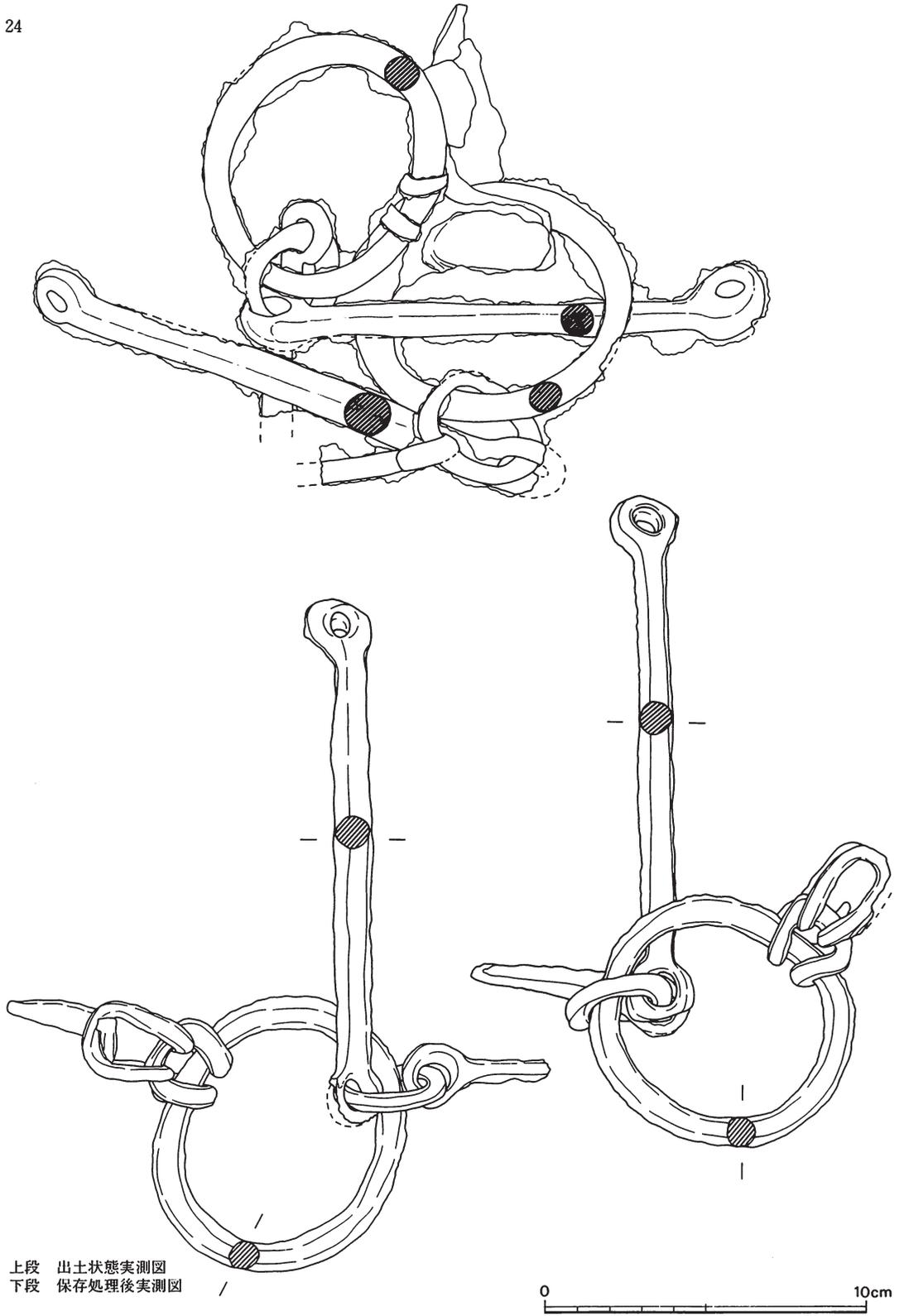
この他、鞍金具の一部とみられるもの (I 23)、幅2.1cm・厚さ2 mmの板地に鋸を打った鞍橋の破片とみられるもの (P L 19) などが出土している。

装身具 (第14図・P L 21、22)

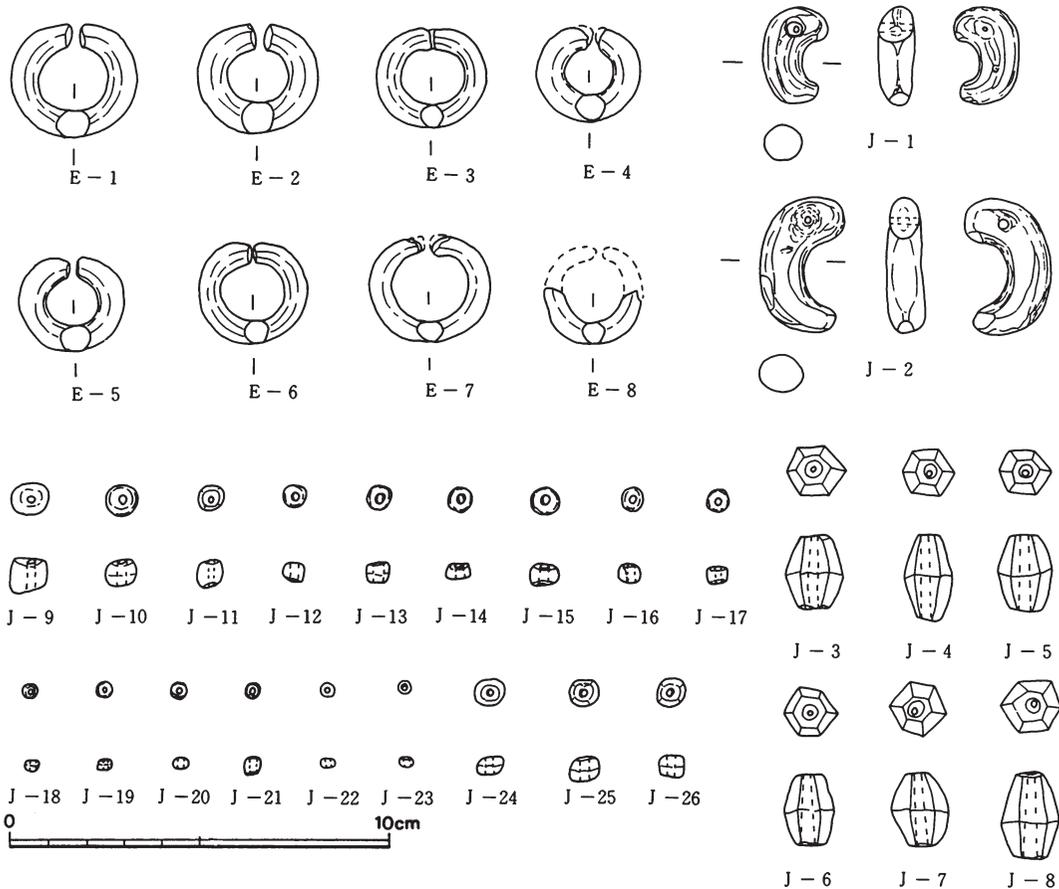
耳環 (E 1～8)、勾玉 (J 1・2)、切子玉 (J 3～8)、ガラス製小玉 (J 9～26) が出土した (第2・3表) 耳環は8個で、二個一対として四対出土している。このうちE 1～4の遺存度は良好であるが、E 5～8は表面の剝落が著しい。玉類は、メノウ製勾玉 (J 1・2)、水晶製切子玉 (J 3～8)、ガラス製小玉 (J 9～26) である。勾玉はコ字形を呈し、孔は片側穿孔による。切子玉は中央部を幅広にして稜とし、断面は6面体で、片側穿孔である。小玉は、やや大型のもの (J 9・10、径7.90～9.10mm)、中型 (径5.50～6.90mm)、小型 (径3.40～4.20mm) のものがみられる。



第12図 石室内出土鉄器・馬具実測図



第13图 石室内出土馬具(轡)实测图



第2表 耳環計測表

(単位mm)

番号	種類	径	厚み	切り口間	備考	
E-1	銀環	31.9×28.5	7.00	2.10	遺存良好 銀色光沢あり	対 E 1 ・ 2
E-2	金環	30.9×27.4	7.00	2.10	遺存良好 金色光沢あり	
E-3	銀環	27.2×24.9	4.90	0.30	遺存良好	E 3 ・ 4
E-4	銀環	27.2×25.6	4.90	0.30	〃	
E-5	金環	26.3×23.3	5.80	1.20	剥落大 内面金色	E 5 ・ 6
E-6	金環	25.5×22.6	5.70	—	剥落大 内面に金張り残存	
E-7	銀環	30.2×26.5	5.20	—	切り口部剥落	E 7 ・ 8
E-8	銀環	23.4以上×14.5以上	4.50以上	—	剥落大 切り口欠損	

第3表 大谷古墳出土玉類計測表

(単位mm)

番号	種類	材質	全長	径	孔径	色	備考	
J-1	勾玉	メノウ	長径 25.00	短径 15.90	厚み 8.70	黄橙色	重さ 4.30 g	片側より穿孔。 むかえ孔あり。 両側面スリケズリ。
J-2	勾玉	白メノウ	34.50	20.50	9.40	乳白色	7.40 g	
J-3	切子玉	水晶	18.40	大 13.10 小 8.40	3.30	無色透明	4.50 g	
J-4	〃	〃	21.70	大 11.90 小 6.50	3.30	〃	4.05 g	
J-5	〃	〃	19.70	大 12.30 小 7.90	3.30	〃	4.20 g	
J-6	〃	〃	18.70	大 12.30 小 7.70	3.30	〃	4.10 g	
J-7	〃	〃	18.70	大 13.30 小 7.40	3.30	〃	4.78 g	
J-8	〃	〃	21.90	大 13.60 7.90	3.30	〃	5.80 g	
J-9	小玉	ガラス	径 9.10	厚さ 8.20	2.00	濃紺色	0.97 g	
J-10	〃	〃	7.90	5.80	2.40	〃	0.50 g	
J-11	〃	〃	6.70	6.30	1.10	〃	0.41 g	
J-12	〃	〃	5.60	4.50	2.10	〃	0.21 g	
J-13	〃	〃	5.50	4.60	2.70	〃	0.25 g	
J-14	〃	〃	6.20	3.70	2.30	〃	0.20 g	
J-15	〃	〃	6.90	3.50	2.60	〃	0.21 g	
J-16	〃	〃	5.50	4.00	1.60	〃	0.15 g	
J-17	〃	〃	5.50	3.50	1.40	〃	0.20 g	
J-18	〃	〃	4.20	2.40	1.50	〃	0.10 g	
J-19	〃	〃	3.70	2.50	1.00	〃	0.08 g	
J-20	〃	〃	3.60	1.90	1.20	緑色	0.05 g	
J-21	〃	〃	3.40	3.20	1.00	紺青色	0.08 g	
J-22	〃	〃	3.50	2.50	0.70	濃紺色	0.05 g	
J-23	〃	〃	3.70	2.40	1.20	紺青色	0.03 g	
J-24	〃	〃	6.00	4.20	1.10	濃緑色	0.28 g	
J-25	〃	〃	6.60	5.80	1.20	濃紺色	0.41 g	
J-26	〃	〃	6.10	5.30	1.00	濃紺色	0.37 g	

V まとめ

大谷古墳は高知県香美郡野市町大谷1395番地に所在し、県立野市総合公園建設に伴う発掘調査として実施された今回の調査によって、横穴式石室を内部主体とする古墳時代後期の古墳であることが明らかとなった。調査の概要については先述したとおりであるが、調査で得られた所見と問題点を記し、大谷古墳の位置付けに触れてまとめとしたい。

1. 立地と古墳築造過程

古墳は、高知平野東部の丘陵部である金剛山（三宝山・標高213.9m）の山頂部から西向きに派生した丘陵南西斜面裾（標高41.0～43.50m）に立地し、南西方向に開口した横穴式石室（N45°E）を有する。墳丘は既に原形を失っていたが、残丘部の規模から、径12m前後の円墳に復元される。墳丘築成及び石室構築は、丘陵斜面を \cup 型に掘削し、地山土である黒ボク土（黒褐色土）及び明黄褐色粘礫土、暗茶褐色粘礫土等を用いて墳丘築成を行いつつ石室構築を図り、古墳の位置する丘陵斜面部及び南側丘陵の北側斜面部からブロック状に産出する硬質砂岩と石英粗面岩（珪岩）を使用して側壁及び袖部（玄門部）としている。また、丘陵谷部及び谷奥部で採集される礫岩、珪岩、砂岩等の碎石により、玄室床面に礫敷（敷石）を施し、礫床としている。なお、玄室中央部から奥壁側には玉石を配する。玄室奥壁部、西側壁奥部、東側壁玄門部の基底石には、硬質砂岩の比較的大型の石材を縦に据え、その他の基底石は横積みに据えている。袖部には長形状の石英粗面岩（珪岩）を立て、右袖石としている。玄室との羨道部の境には、扁平な長石を用いて仕切り石（框石）とし、区画している。袖石上部及び奥壁基底石上部に目地合わせを行い、基底石上部に長形状の石材を横積みして側壁上部を構築する。石材間の隙間には、拳大の礫と粘土により補填する。なお、袖石上部のラインで、石室周辺の墳丘上部の盛土を整え、側壁・奥壁上端部と天井石構築後にさらに盛土を施して、墳丘上部を形成したと推察される。

2. 横穴式石室

主体部は玄室上部及び羨道部を欠くが、右片袖式の横穴式石室で、玄室長4.5m・玄室幅2.04～2.16m・羨道部残存長1.4m、袖石幅0.7mを測る。玄室高は、約1.8m前後に復元される。玄室幅に対する玄室長の比は0.45である。壁面の石材は、奥壁・側壁共に面合せが行われている。西側壁奥側の第二基底石（奥側から二番目）上部に、ノミ痕らしき擦痕が認められるが、風化のため判然としない。奥壁及び側壁の石材表面を入念に観察したが、赤色顔料による装飾・線刻等は確認されなかった。

羨道部は、袖石側の西側壁基底石を残して、両側壁とも現存しなかった。羨道周辺には、側壁の一部とみられる落石がみられた。仕切り石（框石）南側に拳大の礫が少量散在していた他は、閉塞石らしき積石は残存していなかった。また、敷石・排水溝、外護列石、墓道等は検出

されなかった。羨道部は、丘陵斜面端にあたり、斜面擁壁及び墓地への通路によって削平を受けていた。落石下の調査では、玄門部からの地山面の南西傾斜が認められたのにすぎなかった。羨道長については不明であるが、西側壁基底石の規模からみて、玄室長の $\frac{1}{2}$ 前後の短い羨道が付属していたものと推測される。

玄室床面には、拳大の角礫による敷石がみられた。この敷石は、玄室全面にわたるものではなく、玄室中央部から玄門部にかけては希薄になっていた。これに対して、玄室奥壁部・西側壁袖石側は布敷の度合が高く、特に奥壁側から約2.0mの範囲では、角礫間に玉石を混じえるなど、入念な布敷が行われており、玄室内における敷石の内容に奥壁側優先の意識がうかがわれた。玄室内における敷石の範囲に、奥壁中央部から奥壁にかけて、もしくは奥壁側にのみ集中する例としては、伊野町・枝川1号墳、南国市・舟岩1・2・4～6・8・9・11号墳がある¹⁸⁾。なかでも舟岩1・2・5・6・8・9・11号墳では、玄室奥壁部に自然石又は小礫を集中して布敷しており、その範囲は玄室奥壁から1.7～2.0m前後である。このような奥壁側への丹念な敷石布敷は、石室内における奥壁重点性を示唆するものであり、その行為の背景には古墳築造の契機となった第一次被葬者の埋葬に際して奥壁側に納棺するための配慮が行われていたことが看取される。この敷石布敷範囲は、玄室内における空間利用の内容を示すものであり、第一次被葬者の埋葬位置についての分析を進めながら、土佐における後期古墳の石室利用の形態として、地域的なものか普遍性をもつものかについての検討を図る必要があると考える。今後、同様な敷石布敷範囲の集中についての類例が増加することが期待される。また、従来、石室の石材抜取り・盗掘による散乱とみなされてきた敷石布敷範囲の偏在例についても、再検討を講ずる必要があるだろう。

3. 出土遺物と検出状態

玄室内から土器（須恵器）・鉄器・馬具・玉類が、羨道部の落石下から須恵器甕片が出土した。遺物は、敷石（礫床）上で主として検出され、玄室奥壁・玄室中央部西側・玄門部袖石周辺・東側壁玄門部側において集中範囲が認められた。なかでも、玄室中央部西側では水銀朱とみられる朱の散布（10×12cm）があり、須恵器杯身（P 6・7）・壺（P 15）・鉄鏃（I 6）・ガラス製小玉（J 9～16）が出土した。また、玄門部袖石周辺では須恵器類・鉄鏃・鉄釘・メノウ製勾玉・水晶製切子玉が出土し、玄室奥壁では鉄鏃・弭金具が、東側壁玄門部側では須恵器杯蓋・鉄鏃が出土している。遺物の集中範囲のなかで、玄室奥壁の鉄鏃・玄室中央部西側のガラス製小玉と朱の散布・玄門部袖石周辺の勾玉・切子玉の出土範囲は注目される。馬具は、轡が奥壁寄りで、その他が玄門部付近で出土しており、原位置については不明瞭である。耳環は、玄室側壁の東側と西側に離れた状態で出土し、検出位置から被葬者の埋葬位置を推定するのは難しい。しかし、耳環の形状等から、4対の組み合わせが考えられ、耳環数からは少なくとも4人の埋葬人員が考えられる。遺物の出土位置から、被葬者の埋葬位置を特定するのは困難であるが、玉類の集中範囲と朱の散布位置・耳環類のうちE 3・4の位置・奥壁側の鉄鏃の位置・敷石の布敷状態から、奥壁側に1体（第1次被葬者）・西側壁側に2体（第2・3次被葬者）

・東側壁側に1体（第4次被葬者）の計4体の埋葬を推考し、4体以上の埋葬行為が行われていたものと解釈することにした。

出土遺物のなかで、玄門部袖石周辺から内面に水銀朱とみられる朱が付着した須恵器杯身（P8）が出土した。横穴式石室内において、朱付着の須恵器類が出土したのは本県では初例である。玄室中央部西側における朱の散布範囲に関連する遺物と考えられるが、その用途については不明である。石室内の壁面には、朱の付着痕は観察されないことから、使用対象は埋葬儀礼に際しての被葬者への塗付・木棺への塗付・玉類を包んだ織物等への塗付・衣服への塗付・葬送儀礼に参加した者への塗付などが想定されるが、何れも推量の域を出ない。朱の付着した須恵器杯身（P8）は、内面全体に朱を塗付したのではなく、朱を使用する際のパレットがわりに代用した感じを受けるものであり、何らかに朱を塗付することが目的であったものと思われる。なお、朱が付着した土器類の副葬例としては、岡山県上房郡北房町・土井2号古墳で横穴式石室（6世紀後半～7C末）から朱が詰まった土師器壺が、同県英田郡美作町・北山古墳群の1号墳第1主体で内面に朱付着の須恵器壺が、第2主体で朱付着の須恵器杯蓋・身が、3号墳でベンガラ付着の須恵器杯蓋が出土している（5世紀末～6世紀初頭・木棺直葬墓）⁹。

4. 石室構造と古墳築造時期

大谷古墳の内部主体である石室は、右片袖式の横穴式石室である。石室構成としては、①奥壁及び側壁基底石上部と袖石上部を結ぶラインに目地合わせを行い、石材を横積みにして壁面を形成する。②玄門部の袖石は大型の石材を立て、玄門立石とする。③玄室と羨道間に仕切り石（框石）を配し、区画する。④玄室は、長方形型で幅狭の羨道部を付する。⑤玄室床面に敷石をもつ。敷石は奥壁側も入念に布敷する。⑥玄室長と玄室幅の比は2,1である。また、玄室幅/玄室長の指数は、0.45である。⑦羨道幅/玄室幅は、0.63である。⑧石室主軸は、N45°Eであり、南西方向に開口する。以上のうち、②～④の特徴は、土佐の横穴式石室を有する後期古墳の石室構造に通常の状態であり、本墳においても(1)玄門立石(2)仕切り石(3)長方形型の玄室及び幅狭の羨道が採用されている。また、①の玄門部袖石及び側壁基底石上部を石室構築時の目安にする特徴からは、特に袖石上部の高さを主眼として石材配置が行われたことが指摘される。

本墳の横穴式石室に類似する構造をもつ古墳としては、南国市・舟岩古墳群を代表例として抽出することができる。舟岩古墳群は、南国市岡豊町小蓮舟岩周辺の丘陵上に所在する県下最大の群集墳で、昭和42・43年の調査によって12基の古墳が調査され、11基の古墳について内部主体である横穴式石室の内容が明らかにされている。石室はいずれも両袖式の横穴式石室で、石室構造は同一構造の手法が採用されている¹⁰。舟岩1～6・8～12号墳は上記①・②・④の特徴をもち、6・9・11号墳を除いて③の特徴を有する。また、1・2・4～6・8・9・11号墳では⑤の特徴を有する。①～⑤の特徴を具備する古墳としては、1・2・4・5・8・10号墳がある。舟岩古墳群においては、以上の諸点から、①・②・④による石室構築と③・⑤による床面構成が採用されている。舟岩古墳群の石室構造を通して、県下の他の横穴式石室と類

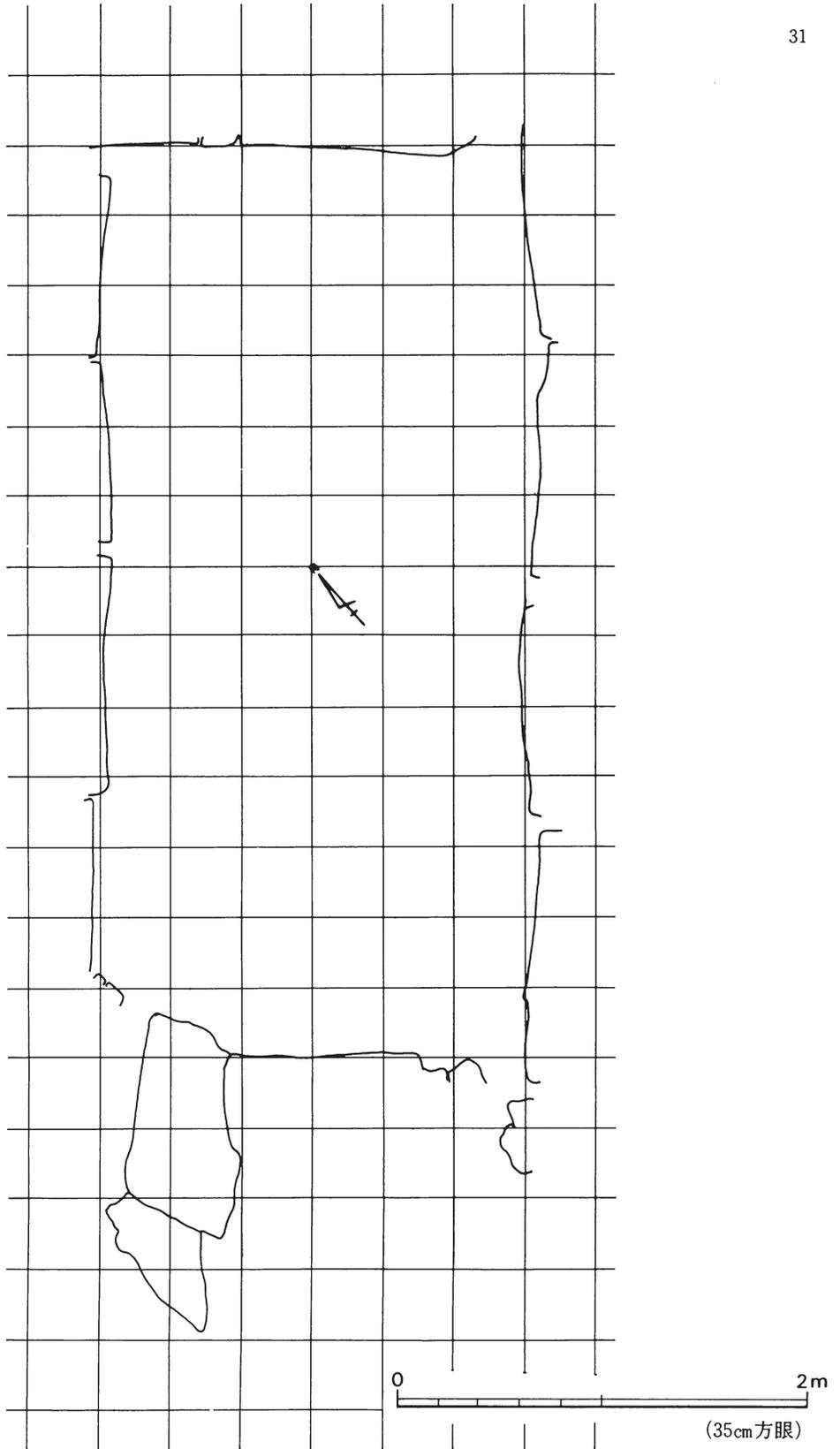
型比較するために、「1. 長方形型の玄室と幅狭の羨道部をもち、玄室長と玄室幅の比は2.0～2.3前後。2. 袖石上部を石室構築時の目安とする壁面構成。3. 仕切り石（框石）を配する。又は玄室中央部から奥壁側にかけて敷石を施す。」特徴を有する横穴式石室を、「舟岩型石室」⁴⁴と呼称し、土佐における横穴式石室の石室類型の一類型として把握しておきたい。

大谷古墳は、片袖式の横穴式石室で、舟岩古墳群の両袖式の石室とは袖部が相違する。また、石材も基底石等に大型の石材が使用されている点が異なっている。しかし、奥壁及び側壁の壁面構成・玄門立石・仕切り石（框石）及び敷石による床面構成・長方形型の玄室及び幅狭の羨道からなる石室構成は、「舟岩型石室」との多くの共通性を見出すことができる。本墳は、「舟岩型石室」とした石室類型の系譜をもつ横穴式石室が採用されていると考えられる。

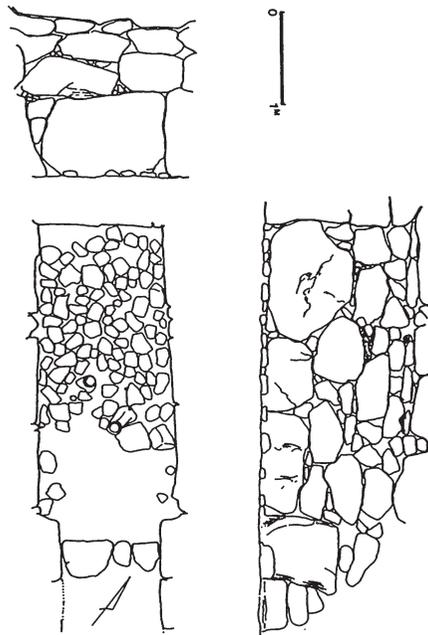
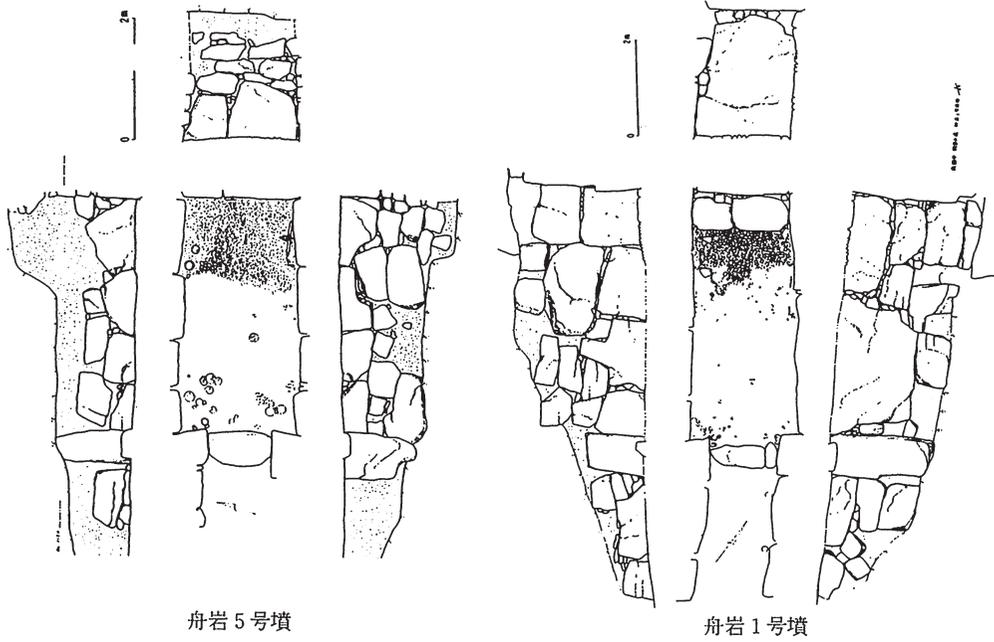
なお、大谷古墳周辺古墳としては、野市町・溝淵山1号墳・大崎山古墳において「舟岩型石室」を有する古墳が築造されている。高知平野北部と東部において同類型の石室が採用されていることは、石室構築に係る専門集団の存在と古墳築造における規範（モデル）が介在していたと推察される。

石室構築の規格性について、平面プランを基に検討を試みた。玄室床面における平面プランに、35cm（高麗尺の1尺を35cmと仮定する）を単位とする方眼を投影したのが第15図である。奥壁から西側壁袖石隅までの間隔は12尺・玄室幅は6尺に符合し、玄室長と玄室幅は2：1の割合となる。また、奥壁から仕切り石（框石）までの間隔は13尺・羨道部側までは14尺となる。袖石部幅は2尺の範囲に、羨道部幅は4尺となる。玄室内における割付は、9尺画で8等分化される。なお、30cm（唐尺1尺・約29.7cm）を単位とした場合は、奥壁から仕切り石（框石）まで15尺・玄室幅7尺となり、奥壁から西側壁袖石隅までは14尺で、玄室長と玄室幅との割合は2：1である。高麗尺と唐尺を比較した場合は、先に例示した高麗尺が適合するようである。しかし、高麗尺を使用尺単位として使用したか否かについては、傍証資料も少なく、にわかに断じがたい。本墳では、石室平面プランを設計するにあたって、玄室長と玄室幅の比を2：1に設定していることを指摘するにとどめたい。

次に、古墳築造時期についてであるが、玄室等から16点の須恵器類が出土している。このうち、須恵器杯蓋（P 2～5）・杯身（P 6～8）・台付長頸瓶（P 13）は形態・成形技法等の特徴から、大別してTK 43～209型式⁴⁵（P 3・4・8・9・10・15・16）・TK 209～217型式（P 2・5～7・12～14）併行期に該当させることができる。出土土器の所属時期から、本墳は6世紀後半～末（6世紀第四半期）の時期のうち、6世紀末に近い頃に築造され、7世紀初頭～7世紀前半にかけて追葬が行われたと考えられる。また、追葬の終末は7世紀第二半期（7世紀前半）に求められる。



第15図 大谷古墳石室プラン図



(参考) 舟岩 1.5号墳 註8 文献から
 枝川 1号墳 註16 文献から

第16図 舟岩1.5号墳、枝川1号墳横穴式石室

5. 被葬者と古墳築造集団

大谷古墳の所在する野市町大谷の西側には、物部川左岸にかけて西野・深淵の大字をもつ土地が所在する。「深淵」の名称を有する野市町深淵は、『和名類聚抄』による香美郡・深淵郷（布加布知・布加不知）の比定地である¹³。また、深淵地区に鎮座する深淵神社（旧県社、祭神・水夜礼花命）¹⁴は、『延喜式』神名帳に記載されており、集落及び神社の成立は古い。

大谷古墳周辺の前古墳時代遺物散布地及び集落跡としては、大谷遺跡・深淵北遺跡・深淵遺跡・西野遺跡群が所在する。なかでも、深淵遺跡は古墳時代後期以降の中心的集落であったとみられ、昭和62・63年の調査により、古墳時代後期（6世紀中頃・後半～7世紀）の竪穴住居址4棟・掘立柱建物5棟・柵列2列・土坑3基・溝7条等が検出されている¹⁵。この調査では、6世紀後半から竪穴住居にかわって掘立柱建物が出現し、7世紀にかけて掘立柱建物が主流となっていることが明らかにされている。時期的には、掘立柱建物が主流となる6世紀後半末～7世紀に、大谷古墳が築造されていることになり、集落の住居構成の変遷過程においても、有力な家父長が登場することを裏付ける資料が得られている。大谷古墳の被葬者の出自を、深淵地区に特定することには問題があるが、後世に「深淵郷」へと発展した古墳時代後期の集落としては、深淵・西野・大谷の大字を冠する地域が該当するものと考えられることから、この地域を基盤とする首長の奥津城として、大谷地区の谷部に墓域を選定したことが推察される¹⁶。

古墳の副葬品のうち馬具類は、素環の鏡板を主とし、飾馬具ではないいわば実用的な馬具が副葬されていた。また、武器類としては、直刀と弓の断片が出土し、加えて広根式の鉄鏃が中心となっていたことが留意される。古墳築造の契機となった被葬者像としては、物部川左岸域の肥沃な沖積平野を開拓し、次第に富を蓄積するに至った、深淵・西野・大谷地区を基盤とする先駆者であったと推測される。また、追葬者としては被葬者の家族及び一族の者であったと考えられる。深淵遺跡で検出された掘立柱建物群は、この地域において古墳を築造し得る集団が成立した背景を端的に示すものであると言えよう。

註

- 1 伊野末喜氏（(有)伊野ボーリング工業）から、調査地周辺の地質概要について御教示をいただいた。
- 2 高橋啓明・出原恵三・吉原達生『深淵遺跡発掘調査報告書』野市町教育委員会 1989
- 3 同上 第Ⅷ章3・(2)～(3) P81～83、第Ⅸ章総括・第2節古墳時代 P120～122
- 4 大谷神社の境内に、大谷古墳から運ばれたと伝えられる硬質砂岩の石材二点が置かれている。扁平な長方形の石材である。伝承のとおりであれば、側壁の一部に使用された石材とみなされる。
- 5 中村浩編『陶邑Ⅲ』大阪府教育委員会 1978
- 6 田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981
- 7 福岡県築上郡新吉富村・宇野台1号墳に類例が出土している。高橋章編『宇野台古墳』新吉富村教育委員会 1990

- 8 岡本健児・広田典夫・片岡鷹介『高知県舟岩古墳群』高知県教育委員会 1968
- 9 平井勝氏(岡山県古代吉備文化財センター)から懇切な御教示をいただいた。
- 10 前掲(8)による。
- 11 大谷古墳築造時期前後の横穴式石室を代表するものとして抽出した。長方形プランの石室は、本県の終末期古墳である高知市・朝倉古墳(巨石墳)まで継承される。概観的には、側壁の石材が大型化しても長方形プランの石室・玄門立石・仕切り石(框石)が設定されている。地域的に特異な構造をもつ横穴式石室の発展・分布は、本県では認められない。また、横穴式石室内における石棺・陶棺の所在も知見されていない。横穴式石室の構造変遷としては、いわば斉一性の強い石室が構築されている。横穴式石室の展開にあたっての消極性がうかがわれる。
- 12 前掲(6)による。
- 13 池辺弥『和名類聚抄郡郷里駅名考證』吉川弘文館 1981
- 14 山本大監修『高知県の地名』平凡社 1983
- 15 前掲(2)・(3)
- 16 廣田典夫「枝川1号墳」『枝川古墳群』伊野町教育委員会 1986

図 版



大谷古墳出土須恵器



遠景（東から、矢印の位置）



古墳遠景（南から、矢印、古墳）

PL. 2



調査前近景（南から）



同 上（西から）



石出検出状態（北東から）



調査風景（北から）

PL. 4



石室内堆積土除去後（南から）



馬具（轡）出土状態（南西から）



調査風景（南西から）



遺物出土状態（袖部・北西から）

PL. 6



遺物出土状態（袖部・南東から）



同 上（北東から）



遺物出土状態（左側壁、羨門部、北から）



同 上（北西から）

PL. 8



遺物出土状態(1・北から)



耳環出土状態(北から)



石室全景（南から）



同 上（南東から）

PL. 10



全 景（羨道側から）



同 上（南東から）



右側壁(南から)



左側壁(西から)



奥 壁（南西から）



羨 門（東から）



右袖部（南から）



調査風景（北東から）

PL. 14



全 景（北東から）



石室掘形検出状態（東から）



石室全景（南東から）



墳丘全景（西から）

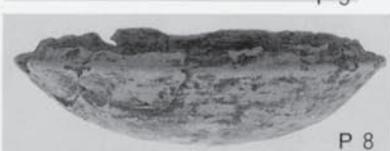
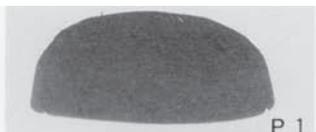
PL. 16



墳丘立割状況（北西から）



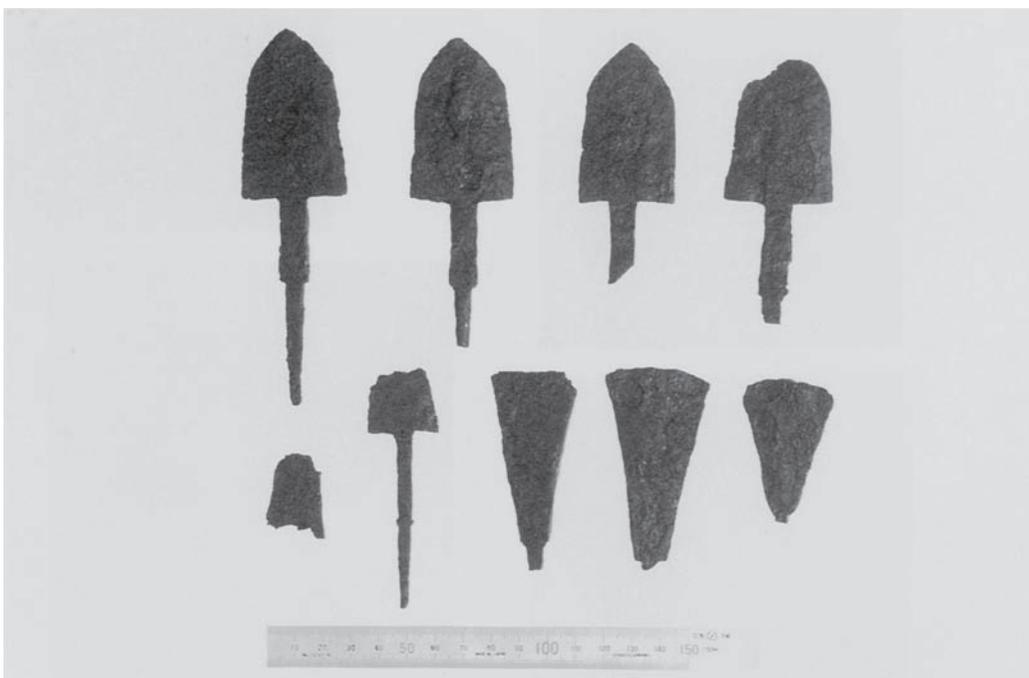
墳丘断面（北から）



PL. 18

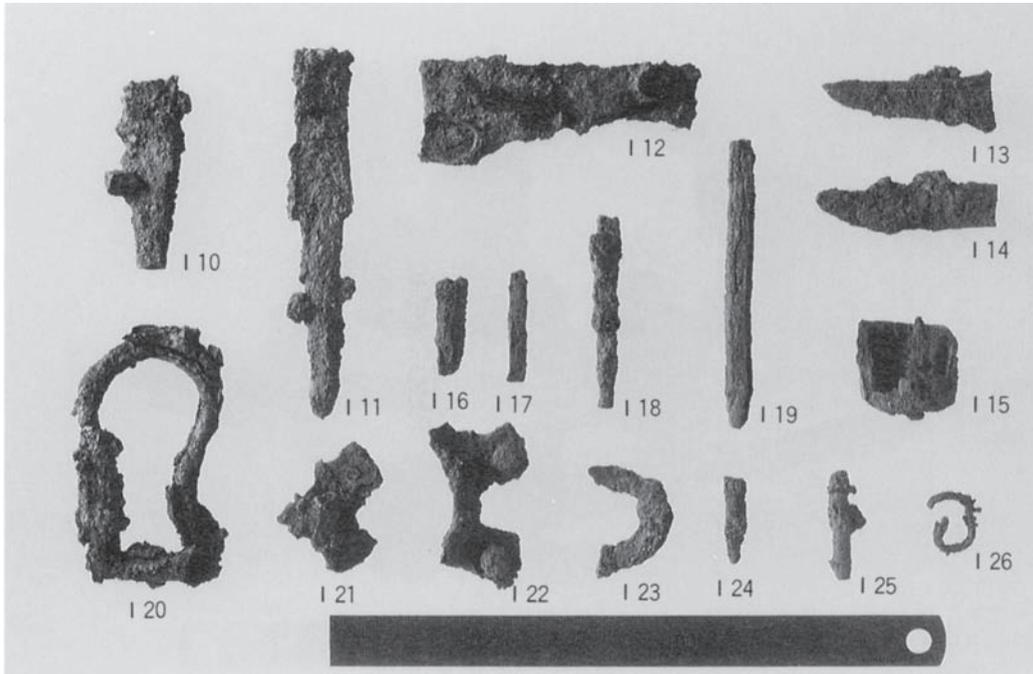


保存处理前

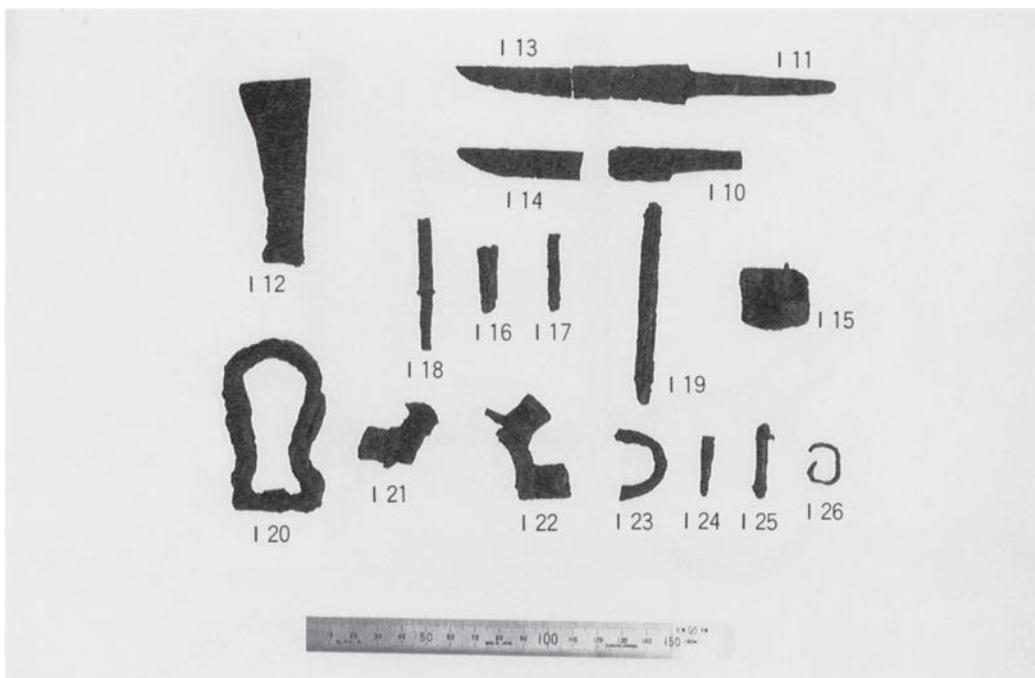


保存处理后

鐵 器 (鐵鍬)



保存処理前



保存処理後

鉄器（鉄鍬・刀子）、馬具・釘

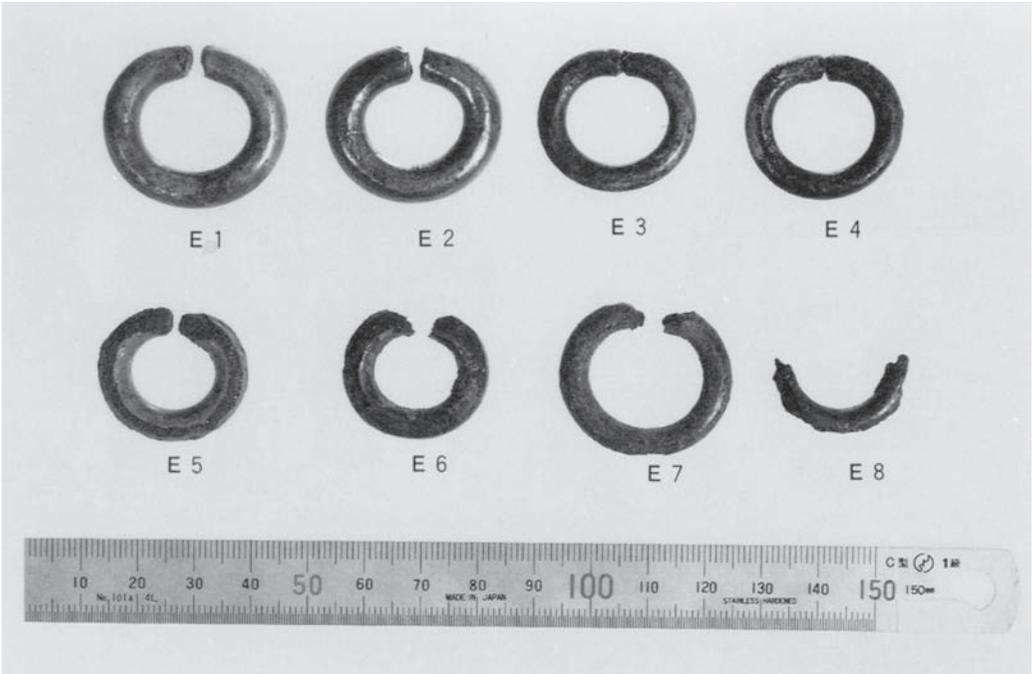


保存处理前



保存处理后

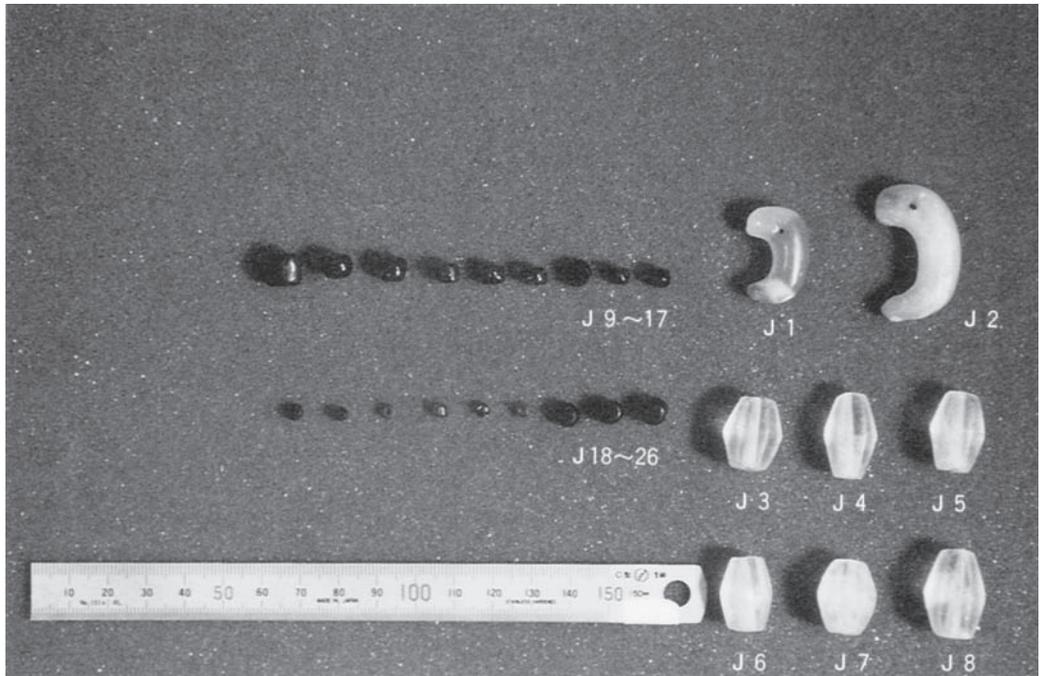
馬 具 (轡)



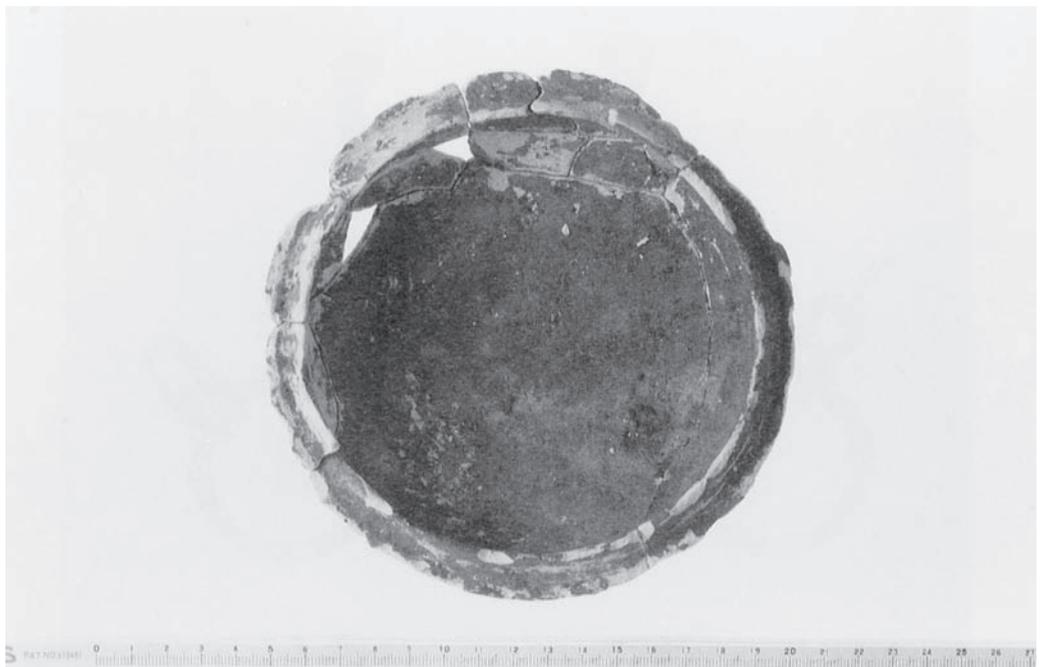
耳環 (E 1 ~ 8) ½縮尺



馬具 (轡) ¼縮尺



玉類（匂玉、切子玉、ガラス小玉）



赤色顔料付着の須恵器杯身（P 8・内面）

大 谷 古 墳

— 県立野市総合公園建設に伴う —
発掘調査報告書

1 9 9 1 . 3

編集・発行 財団法人 高知県文化財団
(〒783 南国市岡豊町八幡字
岡豊山1099-1)

印 刷 有限会社 四 国 写 植
(〒780 高知市針木東町21-18)